# 目次

本尊論（後篇）……聖應院日生
續日本精神運動の先證……和賀義見
法華經講話（第二十三講）……小林一郎
記事
○本部圖報各地教信　○寄附維持金團費誌料領收

第四十年　十一月號

# 本尊論

後篇

聖應院日生師

## 財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ共街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ終來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ潤達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

## 本團略則

◎目的　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎維持員　本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ維持員トス

◎賛助員　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ賛助員トス

◎正團員　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルヽ方ヲ正團員トス

◎入團　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

前回の梗概――法本尊の本體を詳說し終つて、人本尊の講明を佛身論より起用せず一念三千論の上より叙述し、示すに聖判幾多を列記して統一中心の本佛は實に　教主釋迦牟尼世尊なるべきを三大理由に基きて立證し餘芳なし。

已上略述する所の三個の理由に依り、統一中心の本佛は、我釋迦牟尼佛に歸結すべきは公正不偏の確論たるを見るに餘あるべし。前來の講明に於て、佛教多神の統一主は、我釋迦牟尼佛たること稍分明したれば、是より人中心の場合に於ては、妙法蓮華經の法に對しても、尙人を第一位に置くべき所以を論述して、人本尊の絕待的眞意義を發揮し。以て聊か宗學上の一大疑問の解釋に資する所あらんとす。

## 其五

前來論述するが如く、聖祖の主張し玉へる人中心の統一意見たるや、人格的佛菩薩諸世天をば、悉く一大本佛の體用中に統攝するのみならず、諸經諸宗に散說せる三身圓滿の諸佛は云ふまでもなく、如何なる色形を以て寫象せらるゝとも、苟も宗教信念の對象として奉戴せらるべき傾嚮を有するものは、咸く之を本佛の體用不二の活動中に統攝せり。斯かる濶大なる意義に於て、統一主を確立し玉へり、只に此等の人格的信念の對象を統一するに止まらず、進で非人格の法體に於ける思想に對し、能く之を啓發して遂に一大本佛の體用中に統一せしめ玉へり。この非人格の法體を一本佛中に統一せんとするには、勢ひ妙法の法體をも之を一本佛に統合歸一せしめざるを得ず。

由りて予は是より人中心の統一に於ける眞意義を發揮せんが爲めに、聖祖が人中心の側面に於ける、法佛對辨の說明を紹介せんとす。

今之を記述するに當り、重ねて讀者の記憶を喚起し置かざるを得ざるものあり、そは本論の初めに標示したる、『聖祖の本尊を信知せんとせば、法の方面よりし、佛の方面よりし、又吾人本體の方面よりして之を窺ひ、而して次に三者の關係を討ね。更に進んで最終の安心歸着のある所、則ち吾人信念の把住は、何れにありやを了せずんばあらず』と云へる數語にてあるなり。余はこの總標に順ひ、先づ法中心の統一意見たる法本尊を說き、今や人中心の側面に立ち、人本尊論として極力絕待的に人中心の眞意義を語りつゝあるなり。是より人中心の一段を說き終らば、次に巳心本尊論則ち吾人の本體を中心となせる統一意見を叙述し、而して最後に三者の關係を講明し、以て不偏不當完全圓滿なる信念を紹介せんと期するものなり。讀者幸に不肖が講述の順序を記憶し、本論の終結を俟ちて、徐ろに予が本尊論に於ける所見の當否を商量せられんことを望む。

已に法中心の一段に於て論明せるが如く、妙法の法體とは實相に外ならず、而して實相に對する見解多々相岐るゝも、平等無相の一理に偏するものは、聖祖の採用せざる所なり。又六大分散の解說は、是亦聖祖の左擅せざる所にして、聖祖は實相の狀態を先づ十界事體無始無終の上に据へ、この十界の發作活動を捉へて、直に妙法の法體なりと解釋し玉へり。十界事體の無始無終をば、極めて嚴格に主張するもの、是れ實に聖祖の妙法法體論なりと謂ふべし、開目抄(内、二卷四十八丁)には妙法を解して具足道なりと云ひ而して『具とは十界互具なり、足と申すは一界に十界あれば、當位に餘界あり、滿足の義なり、と論じて、妙法の實體は十界の事體無始已來の實在者にして、而も相互に互具融即せるを指したるに外ならず又當體義抄(内廿三卷九丁)を檢するに、最も明瞭なるものもあり、その語に曰く「問ふ、妙法蓮華經とは其體何物ぞや。答ふ、十界の依正即是れ妙法蓮華の當體也」と、斯くの如く聖祖は妙法を具體的に解釋し玉へり、尙ほ觀心本尊抄(内八卷五丁)に在りては、十界の事體互具を詳說して、妙法の法體は斷じて平等無相の抽象的理體にあらざるを主張し、この十界事體互具無始實在の主意を領得せざるものを概括して、佛敎の本義に到達せざる淺見者流なりと喝破し去れり。以て聖祖の妙法法體論は具體的にして、十界の事體を總括したる命題なるを知るに足りなん。

十界の依正即是れ妙法蓮華の當體なりとせば、若し十界の存在せざる場合ありと假定する時に於て、妙法の法體は破壞せらるべきなり。十界總體の存在せざる場合に、妙法の法體は破壞に歸するのみならず、十界中の只一界なりとも存在せざる場合に於ては、妙法の法體は破壞せらるべきなり、十界中の只一界なりとも存在せざる時、妙法の法體が破壞に歸するのみならず、十界各自の本體も亦悉く破壞せらるべきなり。そは一界のその何れも相互に十界を互具せる上に於て、十界各自の本體は成立せるものなればなり。故に十界中の一界だも欠損せば、十界悉くその本體を破壞せられ、隨て妙法の法體は全然破滅に歸すべし。元來十界の分類は、迷悟二界に就て排列したるものなれば、迷界に屬する九界の開合は如何になるとも、そは只迷界中の分類の異同に過ぎずして、敢て妙法の法體に影響せざるべきも、

若し佛界の存立を認めざるときは迷悟二界中の一大面たる悟界を失ふものにして、到抵具體的なる妙法の法體を完備する能はず。佛教は元來迷悟兩界の關係に就て起れるものなれば、實相の狀態に就てもこの兩界の關係こそ着眼點なれ、若しも迷悟兩界のその何れかを失はゞ、實相の趣味も佛教の教義も悉く大破滅に終るべきなり。而して迷界は吾人の直に認識せる所なれば、迷界の存在は何人にも意識せられ、隨て迷界の存立を非認するものはなかるべし、只古往今來佛教の教義解釋上、實相の認識に於て、動搖を來すは、實に佛界の無始實在の光景に關する問題なりとす。聖祖の全力み集注し玉へる教義は、正しくこの佛界の無始實在を法體上より證明し、而して法理法體等の非人格に於ける信仰寫象をも統攝し來りて、十界事體常住論に結歸し、その十界事體常住の中に於て、九界と云へる迷界の無始實在は、吾人の現量し得る所となし、單に悟界たる無始本佛の實在如何に就て、妙法法體の成立と破滅とを確認せしめんと苦心し玉へり。

聖祖が到る處の遺書に於て、二乘作佛と久遠實成とを擧げて、法華經の二大特長となし、盛に解說を施し玉へるは、實に如上の着眼より來れるなり。二乘作佛と久遠實成とを併擧するは、一は迷界に屬するものゝその何れをも漏さず統攝して、その無始實在を證するの意に出て、一は悟界に屬する佛陀の無始實在を證するにあり。要は迷界と悟界とに於て遺漏なく、事體の常住を認めしむるにあり。而して二乘は迷界に屬するものなれば、悟界の無始實在に比して、その關係寧ろ輕きに依り、二乘作佛は理なり



久遠實成は事なりと論じ、吾人が信念上には只實に久遠實成の本佛を信知すると否とを以て最重最要の教義と決し玉へり、開目抄の記述然り、本尊抄の說明式も亦然り、當體義抄の歸趣又復然り。

先づ開目抄の叙述を達觀せよ、上卷七丁に於て『一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり（中略）一念三千は十界互具よりことはじまれり』と總標し、又同十丁に至り『予愚見を以て前四十餘年と後八年との相違をかんがへみるに、其相違多しといへども、先づ世間の學者もゆるし、我身にもさもやとうちおぼうる事は、二乘作佛、久遠實成なるべし』と說き、法華經の二大特長を示し、二乘作佛と久遠實成の諸教諸宗に隱覆せられたるを說き、且つ證明し、同二十五丁に至り『迹門方便品は一念三千、二乘作佛を說て爾前二種の失一を脫れたり、然りと雖も未だ發迹顯本せざればまことの一念三千も顯はれず、二乘作佛も定まらず、水中の月を見る如し、根なし草の波の上に浮べるに似たり』と論明して、二大特長中の二乘作佛も、その結歸する所は、唯實に久遠實成の一事に依りて興廢すべき所以を示し、斯くて久遠實成の顯本を指して『爾前迹門の十界の因果を打破つて、本門の十界の因果を說き顯はす、此れ即ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具百界千如一念三千なるべし』と論結し玉へり。今この聖判の叙述の次第を窺ふに、初めに一念三千の法門即ち妙法の法體を揭げ、而して之を講明するに至りては、その內容は十界互具より起ると說き、その着眼は二乘作佛と久遠實成の二點にありとし、更に進で久遠實成則ち本佛の無始實在を指し

て、眞の一念三千の基礎こゝにありと決判し玉へり。故に本佛實在の一事は、單に佛身論として解釋し玉ふにあらずして、却て妙法の法體門に於て之を開闡し、この法體の成立は實に本佛の實在に由ることを確認せしめ、以て法體法理の非人格的信念を收攬し來りて、その信仰の安立處を明にし玉へり。開目抄上卷廿六丁に於て『かふてかへりみれば』と書して、諸經散說の人格的權佛等を水月に比して、本佛に統攝し玉へるは、最も留意着眼を怠るべからざる重要點なりとす。この『かふてかへりみれば』の一語は、宇宙の實相たる一念三千の基礎を、本佛の實在に歸結し、法體上の解說を統合し得たる佛陀を中心として、人格の統一を論するものにして、決して單なる人格の本佛にはあらず、法體を總攝したる上に立てる本佛なり。

去て觀心本尊抄の說明式を拜せよ、先づ十界の事體互具を論明し、而してこの十界の事體互具に於て九界と佛界との迷悟二界を大別し、その着眼點は迷界に悟界の事體を具足するの一事にありとなし、同鈔七丁に『問て曰く十界互具の佛語分明なり、然りと雖も我等の劣心に佛法界を具すること、信を取り難き者也』と云ひ、十二丁には『但し會し難き所は上の教主釋尊等の大難なり』と書し、十三丁には、『但し初の大難を造せば』と標して、無量義經、觀普賢經を引き、我等に本佛の具はれるを證せんと試みたるも、未だその義を證明し得ざるを以て、十四丁に於て『問て曰く上の大難未だ其會通を聞かず如何』と窮し來り、その決答に無量義經の自然在前の文、法華經の欲聞具足道の文、涅槃經の薩者名具足



の文、龍樹の薩者六也の文、四論玄義の以六爲具足義の文、吉藏の妙者翻爲具足の文、天台の此翻妙の文を列擧し、且つ記して曰く、『私に會通を加へば、本文を蹟すが如し、爾りと雖も文の心は釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を讓り與へ玉ふなり』と、この聖祖の解決は前來幾多の難詰疑問を重疊し來りたる最大要點の決答にてあるなり然るにこの決答の意義如何に精研するとも、妙法は本佛釋尊の因行果德を包容せるものと云ふにあり、能包の名は妙法なるも、所包の實質は本佛の功德に過ぎず、果して妙法の內容は本佛の因行果德の功德なりとせば、本佛の功德を我等に傳達するに於ての、一の方法として、妙法は設定せられたるものにして、實質は全く本佛にありと謂はざるを得ず。予は妙法に就て實相の本體に屬する法體的の妙法と、衆生救濟の爲めに起れる方法的の妙法との別あることを、講明すべき必要を認むるものなれど、そは後日に讓ることゝし、今この聖判を直解する場合には、全く本佛の功德を我等に傳達するに於ての、一種の方法として、妙法を解釋せるものと見ざるを得ず。觀心本尊抄は初め妙法の法體としては、佛界の實在を以て最大要義となし、次に妙法の力用としては、本佛の功德を包含するものと判じ、何れよりするも本佛を起點として、妙法を叙釋し、尙最結文に至り、『佛大慈悲を起して、妙法五字の內に此珠を裹み』と判じ、本佛を第一位に置き、この本佛の大慈悲の發動より起りて、妙法五字は現はれ、而して衆生救濟の方法として本佛の遺し玉へるものなりとの意義を示せり。然れば若し本佛なくしては、妙法あるこ

となく、妙法ありて後本佛あるにあらずと斷定せらるべし。この側面より立論せば、妙法も亦本佛の大慈悲室より發動し來れるものに過ぎず、又非人格の實相的思想も、之を精研審査し來りて、具體的實相を認め、更に進で迷悟の關係より、佛界の實在にその基本を置かざるべからざるを知り、斯くして佛界中心の實相論を完成せらるゝの時、實に人中心の統一に於ける眞意義は始めて領會せられ得べきなり。

更に眼を轉じて法華經の本文に向つて、人中心の意義を窺ひ來るに、方便品に諸法實相と標するも、その諸法實相は唯佛與佛乃能窮盡と說きて、佛知所照の上にあらずんば實相の法體は認められざるなり壽量品に至りて六句の知見を說くも、如來明見無有錯謬と說きて、如來已下の所見は、實相を認むる能はずとなせり、故に天台は佛の所見に約して、實相の正體を論ずと釋し、聖祖は、今の經文の如くば久遠實成の妙覺極果の佛の境界にして、爾前迹門の敎主諸佛菩薩の境界にあらず（內三十八立正觀抄）と判じ、佛知の所照を俟たずしては、實相の正體を認むること能はざるを證せり。

尙ほ壽量品の良醫の譬喩に徵せよ、是好良藥の妙法は、智慧聰達明練方藥の本佛ありて、宛轉干地の迷子たる吾人を惑み、この慈惑の發動より、諸の經方に依り、好き藥草の色香美き味の具足するを集め、之を擣蒰和合して、吾等迷子に賜與し玉ふものにして、若し良醫たる本佛の慈惑發動なくんば、良藥たる妙法は顯はれ來らざるべし。又之を神力品に徵せよ、結要の妙法は、如來一切所有之法等と說き、四句皆悉く如來一切の語を冠せるにあらずや。聖祖が觀心本尊抄に『佛大慈悲を起して』と釋するは、



正しくこの壽量品の經意より出たるなるべく、又同樣に神力品の語に關し、傳敎の釋を引けり、其釋の文を見るに、『明に知ぬ果分の一切所有の法等』と書し、四句皆果分の語を冠せり。以て知るべし、壽量品の良藥は良醫ありて起り、神力品の結要は如來ありて生れたり。この意義より考察せば、妙法の內包は本佛の體用なりと歸結せざるべからず。無量義經に『是の經は諸佛の室宅の中より來れり』と說くもの、今聖祖の智眼を藉りて之を見ば、妙法は正しく本佛の大慈悲室中より發動し來れるものなりと信念するに於て毫も誤りなかるべし、聖祖は當體義抄（內二十三卷十七丁）に於て、妙法の法體を證據立つる唯一の證文は、神力品の如來一切等の文なることを主張し『日蓮は方便品の文と、神力品の如來一切所有之法等の文と也。何ぞ神力の一文を執するや、此一文深意あるが故に殊更に吉き也』とて、神力品の如來一切の文に就て縷述せられたる所以の聖意を窺ふに……、實に……本佛の實在……、本佛の大慈悲……、本佛の發動……、本佛の力用……、等を基礎として、妙法を釋し玉ふのみにして、全く人中心の上より發動せる妙法にてあることを證し、之に由て本佛釋尊の大慈悲に信賴せずんば、本尊論の中堅を確定する能はざることを敎へ玉へるなり。予は開目抄、本尊抄は云ふまでもなく、當體義抄と雖ども、我等信念の對象を確立すべき本尊論に於ける一大構想の上より顯はれたるものと信じ、本尊上に於ける系統ある眼識を以て達觀するにあらずんば、聖意の正鵠を感受する能はざるものと考量せり。故に前來煩を恐れず援引し來りて、聊か予が祖書拜讀の一例を紹介せんと試みたるなり。

讀者は前來の所論に對し、必ず本尊問答抄の法佛優劣の文、及び此種の聖判に對し、如何に會通すべきやを問ふものあらん。そは予が後段法佛一體論の下に至りて、論明せんと欲する所なり。讀者之を諒せよ。

## 其六

人法二種の本尊論に對峙して、優に一方に屹立せるものは、己心本尊論なりとす。吾人の己心は所謂宗教の主體に屬すべきものにして、己心を本尊となすと云はゞ、一見宗教の主體客體を混合せるの觀あり。然れども佛教は己心の研究に富めるが故に一箇の己心を解釋して、能觀の側に立つ己心と、所觀の側に立つ己心との別を示せり。前者は宗教の主體に屬し、後者はその客體の位置にあり。斯くの如く己心に就て、能觀所觀の別を立て、己心を觀境則ち宗教の客體となすは、尤も精密なる思想の上に組織せられたる教義にして、全く智慧行に屬せり。この教義は天台の一念三千觀にありて、盛に論道せられたる所なり。我宗の本尊はこの一念三千觀の一轉したるものなれば、隨て己心を指して信念の對象となし、茲に己心本尊論を生ずに至れり。

彼の獨逸のハルトマンが數世紀後の進歩に於て、始めて構成せらるべしと理想したる、具存一體の教義は實に我宗の己心本尊論に於て、既に構成開發せられたるを見る、己心本尊論復輕視すべきにあらざるなり。

草木成佛口決（外十三）、一念三千の法門をふりすゝぎたてたる大曼陀羅也、當世の習ひそこなひの學者ゆめにもしらざる法門なり。

噫聖祖の妙判一讀し來りて、神氣頓に爽然たるを覺ふ。彼の一念三千の教基を遺却し、極めて薄弱なる理義の下に本尊を立つる宗教は、固より言ふに足らず、一念三千の法門を學習するの徒にありても、僅かに自己の智力を以て觀念するに止まり、未だこの大教義を開展して、一大本尊を確立するに至らざるは、實に聖祖の遺憾とし玉ふ所なり。今の聖判に『當世の習ひそこなひの學者ゆめにもしらざる法門也』と喝破し玉へるは、全く聖祖が透明鋭利なる研覈の結果に由り、萬辭の血涙を披瀝せられたる一大文字にてあるなり。

己心本尊論は聖判中之を立證し得べき的文多し、觀心本尊抄、當體義抄、初心成佛抄、顯佛未來記、日女鈔、教行證鈔、崇峻天皇鈔、眞間釋迦佛供養抄等是なり。

聖祖光顯の大本尊は、その教義の根底正しく一念三千論に在り、天台は一念三千の教義を智慧行に約して己心所具の三千を觀念せしむるに止まり、之を信念行に約し大本尊としての構成を示さず、聖祖は能く之を闡示し玉へり。約言せば、天台は己心を觀境となし、聖祖は己心を本尊となせり。

玄義二、衆生法太廣、佛法太高、於初學爲難、然心佛及衆生是三無差別者、但自觀

己心則爲易。

仝、觀根塵相待一念心起、於十界中必屬一界、若屬一界則具百界千法、於一念中悉皆備足、此心幻師於一日夜常造一種々衆生種々五陰種々國土、所謂地獄假實國土、乃至佛界假實國土、行人當自選擇、何道可從。

是れ天台が己心を觀境となして、一宗の行法を設定せし的據なり。斯く己心の心性には百界千法三世間を具備せるが故に、この己心即包宇宙的の妙體なりとす。この己心に迷へば迷情の衆生なり、この己心を達觀して、能く之を證悟すれば佛陀なり。迷悟の別は一に己心を證悟すると否とに外ならずとなし、この己心を中心として法界を攝收し、この心法妙の教義に依りて、一宗の觀行を設定せり、而して止觀に於ては、この一心一念に三千諸法を含容する所以を詳解したるなり。

斯く天台の一念三千論は、觀智と觀境とを論ずるに止まり、未だ信念と本尊とを闡明せず、聖祖が觀心本尊抄に於て、『迹門を以て面と爲し、本門を以て裏と爲して、百界千如一念三千、其義を盡すと雖も、但理具を論じて、事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊、未だ廣く之を行ぜず』と斷定し玉ふは、正しく之が爲めなり。天台は一念三千論に於て其義を盡すと雖とも、觀智觀境として之を說き其結歸する所理具に止まり、信念と本尊との上にその解釋を進むるに至らず、今の聖判に事行の題目と云へるは、語を換ゆれば信念行にして、本門の本尊と云へるは信念の對境に外ならず。この信念と本尊との二箇の大教義は、實に聖祖の獨步獨妙の法門にてあるなり。天台はこの信念と本尊との上に教義を進むるなかりしとは云へ、この本尊の基礎たるべき教義として、一念三千論を組織せり。聖祖はこの一念三千論を開轉し來りて、本尊論を闡示せるなり。觀心本尊鈔の說明式は、此間の連絡を窺ふに於て、毫も困難を感せざるべし。

觀心本尊抄を拜するに、先づ止觀の一念三千の文を擧げ、次に天台の理具を進めて、聖祖獨步の事具に入り、而して『此等は皆我が一念の十界歟、己心の三千歟』（同抄五ウ）と說き、十界の事體を提げ來りて、之を己心に統攝せんとし、數番の問答を重ねたる後、『釋迦多寶十方の諸佛は我等が己心の佛界也（同抄九ウ）』と說き、十界の事體を束ねて、我等が己心の釋尊は五百塵點乃至所顯の三身にして無始の古佛也』（同十六ヲ）と說き、十界の事體を束ねて、之を己心に統攝し終れり。然れば觀心本尊抄の判旨は己心の妙體を正解し來りて、十界事體の全體を包容せるの己心たることを信知せしむるにありと見るを得ん。

茲に尤も注意すべきは、己心所具の說に伴ふ一種の迷想あること是なり、其は己心所具とし云へば、無形の性質を具有するものとのみ思はれ、己心以外に十界三千の事法の存在を否認せんとするの傾きあること是なり。天台の理具は、性質の上にのみ就て、十界の互具を論ずるも、聖祖は十界の色心業に亘りて、事體の互具を說く、故に己心所具の十界と云ふも、吾人等が普通に思考する所の自己身體中の己心に局して、それ以外に十界の事體の現存實在を否定するにあらず、但之を否定せざるのみならず、十

界の事體の實在者が、我等の己心と一體不二なれば、己心を中心として立論せば、我等の己心中に十界の事體を統攝せらるべきものなりと敎ゆるにあり。我等が己心の妙體たることを道却し、所謂普通の思考の上に現はるゝ淺近なる己心を認めて、それ已外に十界三千の實在を否認せるが如き己心本尊論は眞に謬見の甚しきものたり。此間の旨致分明に了知し置かずんばあらず、彼の奥門徒にありて己心本尊論を採るが爲めに、十界の實在を否定するが如き、又彼の法門の習ひ損ひより起れる『阿佛房サナガラ寶塔』と云へるが爲めに　吾人已外に十界の實在を閑却せるが如きは、皆己心所具と判じ玉へる聖祖の事具論を洞觀し得ざる迷見にてあるなり。

日女鈔（外廿三）此御本尊全く餘所に求むる事なかれ、只我等衆生法華經を持て、南無妙法蓮華經を唱ふる胸中の肉團にをはしますなり。

この聖判は前文に於て十界の事體を列擧し、而して後之を己心に統攝し玉へるなり、然れども吾人已外に客體上に本尊を認むるが故に、この聖判に續きて左の如く示し玉へり、

此御本尊の寶塔の中に入るべきなり。

斯くの如く己心本尊を說くと同時に、客體の本尊を示せるは、己心の妙體を包宇宙的に解說したる上より、己心本尊を說くものにして、少くとも事一念三千論の基礎に就て、己心の解釋に於ける、圓滿なる思想を有せずんば、到底聖祖の己心本尊論を感受すること能はざるべし。

眞間釋迦佛供養抄（內三十七）、釋迦佛御造立の御事、無始曠劫より未だ顯はれましまさぬ己心の一念三千の佛造り顯はしましますか、馳せまいりてをがみ參せ候わばや、欲命衆生開佛知見乃至然我實成佛已來は是也。

この判に吾等己心の佛と說くも、その佛は具體的の釋尊を指せり、則ち造像の釋迦は正しく具體的の佛陀を意味せり。この具體的の佛陀を抑へて、己心の一念三千の佛と呼ぶ、以て知るべし、聖祖の己心本尊論は吾人已外に具體的の實在者を認め、而かもこの具體的の實在者を己心に統攝し來るに外ならず この聖判には未修顯の本覺體たる吾人と、已修顯の本覺體たる佛陀とは、己心の上に交通せるのみならず、全く己心中に統攝せらるゝを敎ゆるなり、而して斯く交通統攝の意を示すものは、吾人の己心の絕妙なるを信知せしめ、隨て速にこの絕妙の本面目を開發せしめんとするにあり、その開發の方法としては、信念と本尊との確立を要するなり。

顯佛未來記（內二十七）、彼の二十四字と、此五字と、其語殊なりと雖ども其意是れ同じ。

是れ妙法五字は不輕の我深敬汝等等と唱道したる二十四字と、其語の表面には差あるに似たるも、其意の內容は同一なりと說くものにして、この判より考察せば、妙法蓮華經は吾人の本面目の絕妙なることを反省せしめ、以て己心の妙體を顯發せしめんとするの意を包含せるものと見たるにあり、是れ己心を中心として妙法を解釋せるものにして、前の釋迦佛供養抄は己心を中心として本佛を解釋せるなり。

斯く己心を中心として人法兩者を統攝するに於て、正當の見解を抱持せば、決して祖敎に背反せざるべきなり。

初心成佛抄（内二十二）、我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉て、我が己心中の佛性南無妙法蓮華經とよびよばれて、顯はれ給ふ所を佛とは云ふ也、譬ば籠の中の鳥なけば、空とぶ鳥のよばれて集るが如し。空とぶ鳥の集れば、籠の中の鳥も出でんとするが如し。

この聖訓は古來己心本尊論の證文として、尤も多く引證せらるる所なるが、その引證者は大抵この聖判の眞意を正解せざるものゝ如し。今この聖判を窺ふに、『我が己心中の佛性』と云へるは、理具說の傾向あるも、後の譬喩によりて考ふるに、吾人以外に具體的佛陀の實在を認むるが故に、單に理具の說明と云ふべきにあらず、『籠の中の鳥』とは己心を云ひ『鳴く』とは信念を指し『空とぶ鳥』とは具體的佛陀の實在を意味せるや明にして、『空とぶ鳥の集れば籠の中の鳥も出でんとするが如し』とは、修顯の本佛と、未顯の己心との感應して、我等の成佛し得るを指せるならずや、果して然らば初めに單に佛性と云ふも、具體的佛陀（空とぶ鳥）と己心（籠の中の鳥）との交通を說く所は、又事具的己心論の一種なり、その意義鮮明ならざるものと見て可なり。斯く解釋し來れば、祖書の多くの場合に示せる己心本尊論は、一念三千論の基礎の上に建設せる所にして、事具の妙旨を諒知して誤らずんば、之を論道するに於て、優に一箇の本尊論たるを失はざるなり。

己心本尊論に伴へる解釋は、宗敎の主體客體の關係を忘却し、又其因て來る敎義の根底を失ひ、一念三千の旨致を離れ、遂に事具の妙談を領悟するなし。加之此輩は人法二種の本尊論に於ける堂奧に進まずして、單に己心所具の一面を謬想して起れるが故に、固より價値なき論道たるべしと雖ども、若し能く此等の曲見を去りて、己心本尊論の正脈を捉へ來らば、是れ復我宗敎義中に於て等閑視すべからざる重要の敎義たるを認めずんばあらず。先師が人法一體、生佛一如の大曼陀羅也と讃歎し玉へるもの、眞に千古の卓見として鐵仰すべきなり。

前來數項を重ねて漸く人と、法と、己心との三種の側面に立てる本尊論を紹介し得たれば、是より三者の關係を調整按排して、人法一體、生佛一如の大本尊を光揚し、聖祖日蓮大聖人が献身的熱誠を捧げて光顯し玉へる、絕高絕妙なる旨致を敬讃し歎美し奉らんと欲す。

以下往年大阪に於ける講習會の講述『本尊論』に委悉なれば爰に其煩を避け、是を結ぶに左揭一項を以てす、讀者幸に之を諒せられよ。猶ほ該本尊論の單行本は品切なるも、『日蓮主義精要』中に編入しあれば往いて精覽せられたし。

## 其七

聖祖の見解によれば、法華經は大本尊を光顯する爲に示されたる教訓に外ならず、法華經は能詮の教門にして所詮の實質は唯一の本尊なり。而して本尊の本體は本佛と本佛起用の形聲とを一具したる所なり、その實體的說明に於ては佛界緣起の法體論にして、又三身論中には應身常住の妙旨を取り、この佛界緣起の法體觀、應身常住の佛陀觀は究竟圓慈說に歸趣して、此等幾多の妙旨妙解は悉く唯一本尊の光顯の上に結束せられ、又信念成佛の要道もこの本尊を尊信すべき勸信上の要義に外ならず、又教道的說明の上には本佛三輪の妙化に於て聲色爲經の妙義を示して、之を本尊の上に光顯するなり。

この本尊の中心たる妙法蓮華經の釋義に就て、古今諸種の紛爭を生じたるが、謂ふに法體と教法との甄別を闕き、兩者の按排を知らずして立論したるもの、そが一因たるべし。天台は分明に兩者の區分を立て又能く按排して之を說述したり。即ち大師が方便品題下の文句に於て十雙の權實を論ずるや、第一理事の權實、第二理教の權實、第三教行の權實等と次第してこの第一の理事の說明を以て法體を成立し、第二の理教の說明に於て教法を解釋し、而して先づ法性の一理を指して理實として、十界三千の諸法を呼んで事權となし、又第二にはこの法體的說明に於ける理事を束ねて理實となして、この理實を顯說せる教法を以て教權と名け、又玄義第七の六重本迹の次第を見るに、第一理本事迹、第二理本教迹、第三教本行迹等と列擧し、この理本事迹は十雙權實の中の理事權實と同じく、法性の一理を本として十界等の事法を迹とし、又理教本迹は理教權實と同じく、理事本迹釋に於ける理事を束ねて理と呼びて顯說したる教法を總稱して教迹となす。即ち天台大師は法體的說明の場合には理事に於て權實本迹を論じ、又教法的說明に至りては法體的說明の場合に於ける理事を一束して實と呼び、本と稱し、教法を指して權と、し迹となせるなり。

日蓮聖人が、四信五品抄(內十六)(七十丁)に、妙法蓮華經の五字は經文に非らず、其義に非らず、唯一部の意ならく耳と判じ。開目抄(內二)(七丁)に於て、一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底に秘し沈め給へりと示し。曾谷抄(內十二)(四十丁)に、南無妙法蓮華經と申すは一代の肝心たるのみならず、法華經の心也、體也所詮也と敎ふるものは、妙法蓮華經を以て敎法と認めずして、之を法體上に於て說明せられたるものに屬し。又法蓮抄(內十五)(廿三丁)に、今の法華經の文字は皆生身の佛也、乃至若し能く持つもの有らば則ち佛身を持つなり等云々と判じ。開目抄(內二)(四十八丁)に、六萬九千三百八十四字、一々に皆妙の一字を備へて三十二相八十種好の佛陀なりと釋し。守護國家論(內十)(廿三丁)に、一心に法華の文字を念ぜよ乃至この經は諸經の文字に似ず、一字を誦すと雖も八萬寶藏の文字を含み、一切諸佛を納むる也と說き。唱法華題目抄(內十一)(四十四丁)に、今法華經は四十餘年の諸經を一經に收めて、十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて釋迦一佛の分身の諸佛と談する故に、一佛一切佛にして妙法の二字に諸佛皆收まれりと示し。妙法曼荼羅抄(內廿八)(五十丁)に、

一の仙藥を留め給へり、所謂妙法蓮華經の五字の文字也と云ひ。梵音聲抄（内十九五十二丁）に、此等梵音聲一切經と成つて一切衆生を利益す、其中に法華經は釋迦如來の書き顯してここの御音を文字と成し給ふ、佛の御心はこの文字に備れり、譬へば種子と苗と草と稻とはかはれども心はたがはず、釋迦佛と法華經の文字とは、かはれども心は一也、然ば法華經の文字を拜見せさせ給ふは、生身の釋迦如來に値ひ進らせたりと思召すべし、と曉諭したまふものは、是れ聖人の妙法蓮華經を教法として、本佛三輪の妙化に於て稱揚し給へる所なり。

斯の如く台當兩家、その旨歸に於ては大に異れりと雖も、法體と教法との關係を認むることは同一轍に出でたり。而して此の關係は、天台大師に於ては妙法蓮華經の體用を說明する場合に於て、最も能く發揮せられたるを見る、其は辨體章に於ては法體的に說明し、論用章にありては教法的に解釋せるが、この體用は一箇の妙法蓮華經を釋するものなれば、先づ法體的に妙法を說き、次に之を教法に移して說き、而して後に行法を成立したるものにして。又聖祖に於ては開目抄に於てその法體を佛界緣起の三千に約して說明し、且つ之を妙法蓮華經の教法の上に於て包籠せることを示し、本尊抄も亦同じく初に佛界起用の三千に約して法體を示し、次で之を教法上五字の題目に於て結束し、判じて釋尊の因行果德の二法は咸く妙法蓮華經の五字に具足す、乃至因果の功德を讓り與へ給ふと云ひ、又佛大慈悲を起して妙法五字の袋の內に此珠をつゝみて、末代幼稚の頸にかけさしむと示し、其他到る處の聖判に於て妙法の曼荼羅は、文字は五字七字にて候へ共衆生成佛の導師なりと云へるの旨趣、若くは五字七字の題目を唱ふれば必らず生死を離るべしと教ふるの眞意は、教法的妙法に於て經用を稱歎するものたるや最も覩易き所なり。之を要するに妙法蓮華經の體用を、正當に意識するには必らず法體的說明と、教法的說明との關係を了得せずんばあらず。

之に就て一言注意すべきことあり、そは天台に於ける法體的說明は、理本事迹の見地に據りて正しく顯體を辨ずるには眞性の理を指して妙法となし、佛陀は本因本果と云ふとも唯長初爲本の主意に過ぎずして無始の報應顯本、即ち人格的實在の意を明さゞるが故に法勝人劣の義を成じ、又教法的說明に於ては三塵爲經、相々實相を談じ、文字即解脫を說き、能詮の經即所詮の體なることを明せども、觀智の行法を取るが故に教法と本佛との關係に於て不離の妙旨を認むること輕きも、之に反して當家に於ける法體的說明は、十界事常の三千、佛果起用の三千、化他廣事の三千、慈悲功德の三千を示すが故に、十界常住論、佛界緣起論の場合に於ては、全然人法一體の旨致に歸し、又化他廣事の三千論、慈悲功德の三千論の場合に進まば、此功德化三千の內に十界事具、佛果起用、化他廣事等の妙旨を包括したる上に於て妙法の法體觀を成立し、教法的說明に於ては信念受持の行門を立てゝ、此信念受持は聞名名字の行を取るが故に、三塵爲經の旨趣は本佛三輪の妙旨を基礎として成立し、玆に教法的の妙法蓮華經と本佛三輪の妙用と不即不離の妙義を開示して、有智無智一同に南無妙法蓮華經と信念口唱すれば、念々

唱々の内に功德化三千の妙法の大功德を受得し、速疾に佛果を成辨すべきを示せるなり。

されば當家の妙法の法體的意義に於ては、人法一體と、功德具足の妙法を領得し、教法的說明に於ては、人法不離と信念成佛の妙旨を會得するを以て緊要の法門となし、又この本尊に就ては、天台に於ける一念三千の妙境は、聖祖に於ては正しく唯一の大本尊に當ることを會得するを要す。

成佛口決抄、一念三千の法門をふりすゝぎ立てたるは大曼荼羅なり、當世の習ひそこなひの學者夢にも知らざる法門なり、天台、妙樂、傳敎內には鑑みさせ給へども弘め給はず、一色一香とのゝしり、惑耳驚心とさゝやき給ひて、妙法蓮華經と云べきを、圓頓止觀とかへさせ給ひき、乃至所詮妙法蓮華を知らざる故に迷ふ所の法門なり。

この聖判に、『ふりすゝぎ』とは、一念三千の頑鈍なる敎義を洗ひ去りて、之を大曼荼羅の上に光顯せるを云ひ。『弘め給はず』とは、天台家に於て未だ信念の對境とせざるを云ひ。又『妙法蓮華を知らざる故に』とは、大功德あり、救濟力あるを知らず、之を信ぜずして、唯自己の觀智を賴めるを指し給へるものにして、以て聖祖の一念三千に對する意見を見つべし。この他此種の聖判甚だ多けれども今は略しぬ、學者精しく究盡せよ。

# 續日本精神運動の先證

## 和賀義見

### イ、末法思想

近來歷史學者が『中世、我が國民精神を誤り害した』と稱して『末法思想』と並びに『百王思想』に就いて種々非難をせられて居る。そは『末法思想が世の終りを豫言し、人心は爲に希望を失ひ、消極的になり、人生から逃避しやうとする思想を植ゑつけたからである』といふのである。然し平安末期の時代にあつて『末法なる語に依つて世が終りになると考へるのは誤りである』と明白に水鏡の著者は此の點を注意して居る。今左にその一節を示さう。

『また末になりて佛法も失せ、世の有樣も惡くなりまかるにこそあるべき理なれば善惡を定むべからず、偏にあらぬ世になるにやなどあざむき思ふべからず。云々』

斯樣に『佛法も失せ世の有樣も惡しくなつて來て偏にあらぬ世になるのではなからうか等と眞實をあざむき思ふとはならない。若し强ひて佛敎も廢滅に歸し世も滅亡するといふ風に考へるものがあれば、そはあざむき思ふものである』と中山內大臣忠親は斷言したのである。

總べて敎化の態度には、本質的に有してゐる最高の價値を指摘してその自覺を促して敎ふて行かうといふ行き方と、も一つは强く現實の罪惡を否定し、その醜惡を見るに忍びずとなして此に懺悔し反省し

て善に遷らしめやうといふ態度との二つがあるのである。斯様に佛教は當に最高價値觀と罪惡觀との二者を用ひて教化し來つたのである。今此に末法思想なるものはその二者を用ひて教化せられたものである事は識者の誰人も肯き得らるゝ處であらねばならぬ。平安末期中世に於ける國體觀の紊亂、道德の頽廢、之等が現實の上に悲しむべき事柄となつて慘ましき無惨の相を展開した時、世は等しく佛者の教ふる末法思想に依つて現實世界の如何に醜惡であり、慨はしき相であるかを反省せしめられたかは想像に難からざる所である。特に法然、親鸞等の人々に依つて最も強く罪惡觀が提唱せられ、その罪惡觀に徹した所から之を厭離して淨らかなる世界への憧憬を持たしめやうとしたのである。然し此の人々は、此の日本國が本質的に持つ價値と、その清淨なる世界は此の人生に本具し、又實現せらるべきである事を顯はし得なかつた。のみならず、その影響する所却つて反對の傾向をなすに到つた事は又否定の出來得ない所であつたのである。

日蓮聖人こそ此の末法思想に對する完全なる解決者であつたのである。世を警告し反省を促す爲に仁王經、藥師經、金光明經等の文を引いて、三災七難を強調し國家の危機を絶叫すると共に、一面に於て『日は東より出でゝ西を照す』日本國の佛教は轉て支那印度、全世界を光被する眞の明教であると喝破した十方を以て淨土となし、此の世界を穢土と定めたる思想をうち返して、眞の佛國土は此の人生に即してあり、十方は垂迹の佛土であると斷案を下した。殊に此の日本の國を以て本門戒壇建立の地と定め『王法佛法に冥し佛法王法に合して』神皇正統の國としての體相と、その活體としての實現とを叫んで、將に來るべき建武中興の先驅をなしたのである。若し一類の人の言ふが如く、末法思想が世の終を豫言する思想に止るものであるならば、佛陀の本意を末法の教濟に置いて、正法の流布を付囑するの必要はない筈である。

法華經を一度熟讀信讀せば、此の法華經は正法時像法時の爲の教といふよりも、その正意は正しく末法時解決の爲に遺された大明教である事がわかる。日蓮聖人は此の意を法華經の豫言に見出し、その豫言の適確なることを證明すべき諸條件を型の如く順序を踏んで色讀體驗したのであつた。

されば日蓮聖人の目に映じたる末法時は、眞の佛教が興隆し人生の本義、國體の尊嚴が顯はさるべき時であるといふ處にあつたのである。故に傳教大師の語を引いて『末法甚だ近きにありと戀させ給ひしか』と先哲の遺されたる使命を自己に見出し、迫害重疊の間に於て御喜びの凱歌を奏したのであつた。

觀心本尊鈔に『本法所持の人に非ざれば末法の弘法に足らざるものか』又　分別功德品に云く『惡世末法の時』藥王品に言く『後の五百歲閻浮提に於て廣宣流布せん』涅槃經に言く『譬へば七子あり、父母平等ならざるに非ざれども然も病者に於て心則ち偏に重きが如し』等云々。已前の明鏡を以て佛意を推知するに佛の出世は靈山八年の諸人の爲に非ず、末法の始め余が如き者の爲なり、然も病者に於てと言ふは滅後の法華經誹謗の者を指すなり。今留めて此に在くとは此の如き好き色香ある藥に於て美からずと謂へるものを指すなり』と。乃至『此の釋に闘淨の時と云々　今の自界叛逆、西海侵逼の二難を指すなり。此の時地涌千界出現して本門の釋尊の脇士と爲り、一閻浮提第一の本尊此の國に立つべし』云々。

深遠微妙、熟讀玩味すべきである。

四恩鈔には、『二千餘年已前に說かれて候法華經の文に載せられて、留難に値ふべしと佛記し置かれ參らせて候事のうれしさ、申盡し難く候』云云。

とある。伊豆の配流も如來の金言を身に讀まんが爲の計らひであり、佐渡雪中の四ヶ年の生活も『數々』の二字を色讀せしむべき機會であつた。身命遁れ難き大難に會して此の法悅の間、尙國家萬民を救はんとせる聖者の胸中誰か之を知る。燦として萬世を照す大光明は大聖の胸臆より放たれたのである。

されば永承七年を以て末法第一年に入つたと言ふ思想は、現實の世想が無慙であり醜惡であり、悲しむべき事柄を續出せしめた事と相俟つて、その苦しみより濟はるべき方向と手段とを佛敎に要求し促したのである。そして法然、道元等の人々が捉へた方向なり手段は、之等の行詰りを打開するには、一面に於てはその要求を滿しても、他の一面に大なる欠除せるものがあつて、全面的の救濟に應じ得る指導原理としての內容と並びに實踐とを有して居なかつたのである。爰に日蓮聖人法華經色讀の態度は、一世を覆ふて居る思想の行詰りと現實の醜惡とを救ひ得る强力なる一大事實であつたのである。此の點が宗敎的、思想的により深く世の識者の留意し硏鑽しなければならぬ要點と信ずる。

## ロ、百王思想

次に百王思想に就いての考察をする必要がある。此の百王思想は、漢書に『天下治和、百王同之』とあるに初まり、古事記には『懸ケ鏡ヲ吐ク珠ヲ百王相續ス』との一節がある。百王と言ふ思想が、八幡太神に對する信仰と關聯して八幡太神百王守護の思想が我國思想界に廣く影響を持つやうになつたのは、平安朝中世以降、殊に鎌倉初期に最も著しかつたと思はれる。

そこで此の八幡太神百王守護といふ事が、文字通り百代を限るのであると考へて、中世の國民精神を誤つたのであると言つて居るのであるが、然しそは決して妥當なる考へ方ではない。此の點について已に早く鎌倉時代末期の著書『愚管抄』に於て僧慈圓が警告して居る。

『たとへば百王と申すにつきて、之を心得ぬ人々に心得させん料に、譬をとりて申さば、百帖の紙を置きて次第に使ふ程に、いま一二帖になりて又まうけ加ふる度は、九十帖をまうけて使ひ、又それも盡きてまうくる度は、八十帖をまうけて使ひ或は餘りに衰へて又起るに、たとへば一帖のこりと、その一帖いま十枚ばかりになりて後九十四五帖をまうけなどせんをば衰へ極りて殊によく起り出づるにたとふべし』

以上提示した文獻に依つて、百王思想なるものが百代を制限して考ふべき思想でない事を當時の識者は已に知つて居た事がわかる。然るに殊更に百代を限るが如く强ふるのは餘りに偏狹過ぎる態度と言はなければならぬ。佛敎に於ては『數を擧げて非數を說く』と言つて有限の數を擧ぐるやうであるけれどもその意を採つて行けば非數即ち無限を意味するものであると說いて居る。

肇國の御神勅に於て『豐葦原千五百秋瑞穗の國は我子孫の王たるべき地なり』と詔し給へる事は決して千五百年を限るの謂ではない。『天壤と共に窮りなかるべし』と下に宣べ給ふ所に御神意があると拜さなければならないのである。故に殊更に窮屈な解釋を施し、以て我等の祖先を傷くるよりも正しく眞意をとり解釋融通してその眞實なる體相を把握せしむるの態度が國史を取扱ふ上により以上重大なる意義を爲すものと言はなければならない。『天下治和し百王之に同ず』とはどうして數の上に於ける百を限つての事を意味するものであらうか。又古事記の文の『鏡を懸け玉を吐き而して百王相續し、劍を拂ひ邪を斬り以て萬の神攝息す』とあるのがどうして我が帝室が百代を限るの謂であらう。こは鏡、劍瓊三種の神器の御德に依り永遠に我神國の昌えまさ

ん事を古事記の序文に於て大ノ安麿が筆せるものである。然るに平安朝の末期に於て八幡太御百王守護の思想が廣く信せられて居た時、恰も安德天皇の西海御入水の崩御あり、承久の亂に於ける三上皇の配流、さては陰慘な世の有樣の打ち續くを見た人々は偏にあらぬ世になるのではならうかと考へるものも少くなかつたであらう。故に愚管抄の著者慈圓が紙百帖を次第に使ひて殘り少くなれば又之に八十、九十帖を添へ之又次第に使つて殘り少くなれば又之に九十餘帖を加へ、斯くの如くして世は衰ふるとも必ず復古の運動起りて永遠無窮に帝室の存續し給ふべき事を敎へたのである。

日蓮聖人が立正安國論の劈頭に於て『二儀壁を合せ五緯球を違ぬ、三寶世に在し百王未だ窮らざるに此世早く衰へ、其法何ぞ廢れたる』と悲憤憂國の聲を放たれたのは全く『天壤と共に窮りなかるべき御國體』の信念に住し給へるが故に發せらるゝ語である。

のである。されば我帝室を以て轉輪聖王の活現となし、神皇正統の天皇を以て國家の中心となし、萬民一つ心に建國の大精神を奉じ、正法を信じて天業恢弘の皇謨を億兆一心翼贊し奉るべき事を强調したのであつた。

終りに神皇正統記の一節を引いて更に明確ならしむるの資料とする。

『また百王ましますべしと申すめり。十々の百にはあらざるべし、窮りなきを百といへり。百官百姓など言ふにてしるべきなり。

昔皇祖天照大神、天孫の尊にみことのりせしに『寶祚之隆當與天壤無窮』とあり天地も昔に變らず、日月も光を改めず、況んや三種の神器世に現在し給へり。窮りあるべからざるはわが國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて貴み奉るべきは日嗣をうけ給ふ皇になんおはします』

（昭和十年春之を稿す）

# 法華經講話

（第二十三講）

小林一郎

この間は方便品の中で、釋尊が世の中に出て敎を說かれたその目的を打ち明けられたところで、いろいろな點から佛の敎といふものは、要するに一つ所に歸着するのだといふことを說かれてあります。その中の『理一』といつて、道理は同じであるといふことを言はれた。本當の事といふものは二種はないのであります。佛樣がどれほど大勢出ても、又敎の說き方がどれほど違つても、結局一つ所に歸着しなければならない。一つ所に歸着するのであるけれども、聞く方の人の力が違ふと、初めから本當の事を言つても容易にその心に入り難いから、それでいろいろな方便を設けて、淺い所から說いて行くけれども、結局は佛樣御自身がお覺りになつたのを打ち明けて、その儘に說かれるといふことにならんければならぬ。これは『今正しく是れ其の時なり』さういふ時が來なければ仕方がないけれども、だん〳〵永い間敎を說いて行つて衆が本當に解つて來れば、その時期に於て佛樣御自身のお覺りになつた通りを少しも隔てなく說かれる、この間斯ういふところを讀みました。『我が此の九部の法は衆生に隨順して說くのであるが、それは大乘に入る手始めとして說く』のである、それでだん〳〵四十年餘り說いて行つた結局は『故を以て是の經を說く』といつて、今この法華經に言ふやうに自分の思ふ通りを打ち明

けて說くのである。

これは『理一』といつて、道理が結局は一つだといふことを說かれたのであります。

佛子の心淨く　柔輭に亦利根にして
無量の諸佛の所にして　深妙の道を行ずる有り
此の諸の佛子の爲に　是の大乘經を說く

（有二佛子心淨　柔輭亦利根　無量諸佛所
而行二深妙道一　爲二此諸佛子一　說二是大乘經一）

このところは『人一』といつて、人間には利口だの馬鹿だの、善人だの惡人だのいろ〳〵あるけれども、みな佛に成れる性質を有つて居る。所謂佛性を具へて居る。今眼の前で言ふといろ〳〵な人間が居るけれども、誰だつてその迷ひに充ちて居る心の奧には、佛と一致する樣な性質を有つて居るのだから早いと遲いの違ひはあるだらうけれども、結局はみな佛樣と同じに成れるのだ、斯ういふことを打明けられて居る、それが『人一』といふことでありますその事が若しシツカリと捉まらなければ敎を說くといふほど實は愚な事はないわけです。今の所では聞いても解らぬ者が澤山居るのです、寧ろ解らぬ者の方が多いでせう。それで正しい敎を聞いてもそれに歸依するどころではない、寧ろそれを迫害する者もある、それを侮る者もある、笑ふものもある、罵る者もあるといふやうな狀態でありますから、その狀態の中に於て安んじて敎を說くには、すべての人が結局は一つ所に行くのだといふ、この確信を持たなければ敎は說けないわけであります。

その事をこゝに言つて居るのであります。『佛子』佛の本當の弟子、その本當の弟子が先生に對する關係は親子のやうなものでありますから佛子といふ、『心淨く』淨くといふことは煩惱を離れたことで、煩惱を離れるといふことはモウ少し進んで言へば、小さい自分を中心とする心持がなくなつたこと、『柔輭』といふことは、たゞ柔しいといふことではない



我を張ることを廢めることです、だから學問をしたり、修行したりする上に於て最も大事なのが、所謂柔輭といふ心持です。幾ら自分が智慧が進んで居つても學問があつても、佛樣に敎ぶれば言ふに足らぬものである。だからいつまでも自分はつまらない者だと考へて、敎を求めて已まないといふ心持がなければならぬ、善いものであれば幾らでも取入れるといふ心持です。その反對が我を張つて、モウこれだけで大丈夫だ、自分の考へはこれで大丈夫シツカリして居るといふやうに考へる、それは柔輭の反對でそれを涅槃經の中には、

『剛强にして化し難き者』

といつてあります。これが大分多いのです、少しばかり解ると、『モウ解つた、これで大丈夫だ、自分の習つた事は本當だ』と決めこんでしまふ。さうするとモウ自分で自分の一種の人生觀を作つて居るから、容易なことでは他の敎は入らない、剛强にして化し難き者で、なか〳〵斯ういふのを敎化することは難かしい。しかしそれでも永い間敎を學びますれば、幾らかづゝ心がほゞれて柔しくなるでありませう。本當の佛のお弟子になつて、本當の菩薩の行を積むといふやうな境界になれば、それはモウ柔輭であつて、假令自分が十分物が解つてもモツト進んで敎を求めるといふ心持がなければならない。

それで柔輭といふことゝ、能捨といふことは、チヨツト違ふやうですが、同じ心持です。自分の今までの行掛りを一切捨てる、『今までこれだけ解つて居る』といふ、その解つて居ることに拘泥つて居つては新しい敎は入らないのですから、自分が解つて居つても、それより善い敎を求める時には、モウ全く何も知らない者のやうな謙遜な心持になつて敎を求める、それが所謂能く捨てるといふことであります。行掛りに執はれて居つては何も出來やしない。私は學生の時分に或る人の家に居候をして居つた

その人の道も敎もナニモそんなことに大して心掛のある人ではありませんが、商賣がなか〳〵上手な人で、遠くの田舍から東京に出て來て可なり商賣をして發展して、立派な仕事を始めた人であります。その人の家に私は數年の間居候をして居つた、それから後には學校の寄宿に入つたりして、どうやら斯うやら學校を卒業した。なにしろ其家に居候をしたのが始めになつて、自分が學問をしたのでありますから、その恩は忘れることは出來ないと思つて學校を出て間もなくお禮に行つた、『兎に角あなたの所に置いて貰つたのが初めになつて學問を一通りすることが出來て、學校を卒業することが出來た、これからはマア世の中に出て自分で働くのです、今までの御恩にお禮を言ふために來ました』と言つたところがその人も大變に喜びまして、『それはマア結構だつた、しかし學校を卒業したからそれで終りといふのぢやないから、これから大いに勉强したら宜からう』といふやうなことをいろ〳〵話して呉れて、その擧句に『私は學問はないのだから學問の事は知らないが、商賣の事は一通り心得て居る、商賣だつて、學問だつて結局同じだらうと思ふから、自分の今まで經驗した事を話すが、一圓捨てゝ二圓儲かる時には誰でも一圓は捨てる。ところが百圓捨てゝ百一圓儲かる時に、百圓捨てる人は非常に少い百圓と百一圓、似たものだらうから、折角握つた百圓を捨てるには及ばないと思つて捨てない、しかし本當に儲けるといふ上から言へば、それぢやいけないのだ、一圓捨てゝ二圓儲けるのも一圓の儲なら百圓捨てゝ百一圓儲けるのも一圓の儲だから、儲けるためだと解つたなら捨てたつていゝぢやないか、その思切りがなければいけない、自分は永い間商賣をして見たが、こゝの思切りが大事だと思ふ、あなた方がこれから學問をしたりするのでも結局さうぢやないかと思ふが、どうだらう』といふやうな話を



して呉れた。その時は私も歳が若うございましてありましたが、しかし何だか變つた事ですから心に留めて居りましたが、今日になつて考へて見ると洵にいゝ敎訓であつて、實際さうです。非常に良い物と惡い物を較べれば、惡い物を捨てゝ良い物を取るのは誰も躊躇しない、しかしながら大概似たものだといふと、『どちらでもいゝナ』といふ氣分になるしかしそれはいけない。人間として世の中に立つ以上、一番良い物を取らなければいけない、九十九の物と百の物と較べて、若し百の物を取るために九十九の物を捨てるがいゝなら、いつでも捨てゝいゝわけです、『ナーニ似たものだ』といふ考であつてはいけない、すべてが完全なることを理想としなければならぬ筈でせう。私は商賣の事は知らぬけれども、その敎訓は非常に面白いと思つた、それが所謂『柔輭』といふことであります。今まで自分が知つたからといつて、それに拘泥ることはない、それよりもモット善い敎があつたら、今まで習つたことはみな捨てゝしまつても構はない、モット善いものがあつたら直ぐそれを取つたらいゝ、斯ういふことであります。いつでも吾々は今までのものを捨てゝモット善いものを取らうといふ用意をしなければならぬ。佛樣は完全無缺な方でありますから、佛の境界に到達すれば、それはモウ何も文句はないでありませうけれども、佛の境界に到達する間といふものはいつでも捨てゝは善いものを取り、捨てゝは善いものを取つて、結局一番善いものを取るのだ、斯ういふ心持を持たなければならない、それが所謂柔輭の心であります。少しばかり解つたからといつて我を張つて居れば、モウ行歩りなんです。

又『利根』といふのもさうであります、物の善い惡いをハッキリと見別ける力のある人、これが利根であります。これは前にも申したと思ひますけれど

も善惡と言つても、賢愚と言つても結局同じである惡いといふのはつまり愚なんです、本當の事が解らぬから惡い事をする、愚といふのは要するに鈍いからです、善い惡いの見別けがつかないからです。ですから善惡といふことは、賢愚といふことでもあれば、利鈍といふことでもある。世間では利口に世の中を渡つて巧くやつて居るといふやうな人があつてそれが隨分間違つたことをやつて居りますけれどもさういふのは本當に利口でもなければ、本當に賢いのでもないでせう。賢きに似て實は愚かなのであつて、本當に言へば善惡といふことは賢愚といふことで、賢愚といふことは利鈍といふことである、眞に人間としての道が見極めがつくならば、間違つたことをやらう筈がない。人に迷惑を掛けて自分だけ良くして、それで人間の本當の意味が全うされるわけのものではないのであります。でありますから要するに利根といふことは、結局善い敎を求めて少しも怠らないといふことです。

それで『無量の諸佛の所にして』いろ〳〵な佛樣に仕へて佛樣の敎を學んで、さうして『深妙の道を行ず』これは初めは極く淺いところから行くのでありませうけれども、一番終ひは極く奧深い、佛樣御自身が修行をなさつた。それと同じ道を歩いて行つて、結局佛の境界に近づき得るやうな、そんな奧深い修行をして居るものがある。そこまで行けば『此の諸の佛子の爲に』佛のお弟子である者のために大乘經即ち法華經を說く、結局は誰でも佛に成れるのだ、佛に成るまでは努力を廢めてはいかぬぞといふ、この敎を自分は說いて行くのである。

**我是の如き人　來世に佛道を成ぜんと記す**
**深心に佛を念じ　淨戒を修持するを以ての故に**

（我記ニ如レ是人　來世成二佛道一　以ニ深心念レ佛
修ニ持淨戒一故）

**自分は斯ういふやうな人ならば、即ち本當に柔輭**





の心があつて、又利根な人であるならば、必ずや來世に佛道を成じて、今直ぐといふわけにはいかないけれども、だん〳〵歲月を重ねる間に佛に近づいてさうして佛と同じ境界になるのでありますから、即ち一切衆生を濟ふことが出來るぞと記する、『記す』るといふのは約束するといふことです。必ずその修行を途中で弛めてはいかない、途中で後返りしてはいかぬが、その今の心持を持續けて行きさへすればキット佛と同じ境界になるぞといふことを自分は約束してやる。

それは何故かと言へば、『深心に佛を念じ淨戒を修持する』から、さういふ風になれるのである。佛を念ずるといふのはいろ〳〵の方法がありませう、今までもさま〳〵なる信仰の程度に付てお話申上げたことがありますが、佛樣を念ずるといふ人は世の中に澤山ある、しかしながら深心に佛を念ずるといふ人が割合に少い。極く淺薄な方で言へば、佛を拜んで、佛樣に賴んだら儲かるだらうとか、病氣が癒るだらうといふやうな意味で佛を念ずる、それも佛を念ずる一つでせう。それからモウ一つ言へば、佛に賴んだら自分の心の迷ひがなくなるだらう、心の苦悶がなくなるだらうといふやうな考へで、佛を賴む者もある、それも佛を念ずる一つでありませう。だから佛を念ずるといふのはいろ〳〵な方法があり、いろ〳〵な程度があるに相違ない。しかしながら深心に佛を念ずるといふことはどういふことかと言へば、自分の心と佛の御心と惑かれて居るから、已むに已まれずして佛を念ずるといふ、それが本當に深心に佛を念ずるといふことでなければならぬ。何としても廢められない、自分の心の奧には、小さい利害損得を離れて生きたいといふ心持があるのだから、その心持が、佛の敎を聞いてそれに心が惑かれて行く時になると廢めようといつたつて廢められやしない、どうしても佛樣の方に始終心が惑か

れて、佛を忘れることが出來ない、佛を離れて生きることが出來ないといふやうになる。それが『深心に佛を念ずる』といふ、心の奥の奥から佛に惹かれる心持が湧いて來る、そこにならなければ本當ではない。そこになればモウ利害損得などは要りはしない、その心の底から佛に惹かれるといふことがなくて佛敎をやつて居るから、『法華を　三年やつても　熒雖が多いから念佛に變らう』とか、『題目を毎日やつて居つてもチットモ病氣が癒らないから、今度は不動樣を信ずる』とかいふやうに、心が始終ぐらついて行く、さうして心の奥からは何も出て居ない、上つ面ばかりで惹かれて居るものだから、何か事がありさへすれば始終變つてしまふ、心の奥から出て居れば、どんな事があつても、已むに已まれぬ心持で行きますから、佛と離れやうわけがない。

さうしてその佛を念ずるから、『淨戒を修持する』佛樣の吾々にお與へになりました戒を始終修行して、それを持つて、さうして佛の敎に違ふまいといふ心持を持つことになる。これは梵網經といふお經の中に斯う言つてあります。

『汝は是れ當に成ずべき佛なり、
我は是れ已に成せる佛なり』

お釈迦樣は吾々に向つてさういふやうに宣言して居らつしやる、お前達は當に成ずべき佛である、これから佛に成らうといふ人間なんだ、自分は已に成せる佛である、過去永い間の修行を積んで佛に成り來つたものである、だから汝等と自分――お釈迦樣との間に根本的の違ひがあるのではないのであつて つまり自分の方が先輩なんである、お前達でも骨折つて行けば自分と同じ境界に成れるといふことを言つて居られる、さうしてその事を信ずるのが、それが『持戒』といふ、戒を持つことの根本精神だといふことを梵網經の中に言つてあります。

これより外に戒を持つといふことの根本はない苦



です。自分は佛に成れる者であるのに、佛に成らんといふことは何故だらう、それは迷ひがあるからである、行ひに缺點があるから、佛と隔りがあるのだ これは殘念なことだ、なんとかしてこの迷を取り除いてこの缺點を取り除いて、折角佛と同じ性質があるのだから、佛樣と變らないものになつて見たいといふ。この心持が心の土臺にあるのだから、戒を持つといふこと位は譯はない話である。決して戒を持つといふことは窮屈なことでも何でもない、自分を完全にすることなんでありますから、決して窮屈なわけはない。この持戒といふ言葉は、意味を取つて支那で譯したのでありまして、印度の梵語では『尸羅』といふ、尸羅といふのは直譯すれば『清涼』といふ言葉であつて、持戒といふのは全く意譯であります、梵語を直譯すれば清涼、清く涼しいといふことです。吾々の心は迷ひがありますから、心が暑苦しい、心にいろ〳〵煩悶があつたり苦悶があつたりするから、丁度昨今の暑さの中でのた打ち廻つて居るやうな狀態で居る。それが今度は戒を持つて佛樣のやうな生活になれば、洵に涼しくて、少しも苦しいことはありはしない。戒を持つといふことは涼しくなる道である、即ちすべての熱を離れる道でありまして、それを印度の元の言葉では尸羅といふ。

それですから本當に佛を念じて、佛と一致することを理想とするならば、淨戒を修持するといつて、佛の戒を持つことは無論出來るわけです、持つまいと思つても持たずには居られないわけであります さういふ風にして行けば、現在は凡夫であつて、佛の境界と大した距離のあるものであつても、結局は必ず佛と同じに成れるぞ、斯ういふことを約束される。

**此等佛を得べしと聞きて　大喜身に充徧す**
**佛彼の心行を知れり　故に爲に大乘を說く**

（此等聞レ得レ佛　大喜充二徧身一　佛知二彼心行一
故爲説二大乘一）

それだから『此等』は、さういふやうに佛の大乘の教を必ず信じやうといふやうな心持を有つて居る者は『佛を得べし』といつて、自分が將來この修行を續けて行けば、佛樣と同じ境界に成れるぞといふことを許されたからそれを聞いて非常に大きな喜が身中に一パイになつて、モウ斯んな滿足はないといふ風になる。

『佛彼の心行を知れり』で、その佛に成るまでは修行を廢めまいといふやうな決心のついたことがよく解りますから、そのために『大乘を説く』即ち自分の心持を打ち明けた事を説かれるのであります。

ところがこの事は短い言葉でありますが、非常に意味が深い、さういふ極く解つた人間のために教を説くのだと思つて、他の者がこれを外部の事と思つてはいけないぞといふのです。さういふ風にこの言葉を補つて、これはこれだが、しかし他の者が『あれは特別の人間の爲にお説きになるのであつて、自分達に緣が無いものだ』と思つてはいかぬといふ、何故なら、

**聲聞若は菩薩　我が所説の法を聞く事**
**乃至一偈に於てもせば　皆成佛せんこと疑無し**

（聲聞若菩薩　聞二我所説法一　乃至於二一偈一
皆成佛無レ疑）

聲聞といふのは前に申すやうに、佛の小乘の方の教だけを聞いて修行する者、即ち心の迷ひを除いて心の煩悶苦悶を去つて、さうして世の中を淨らかに安樂な氣分を以て渡ればいゝといふ位な心持で修行して居る者。それから菩薩といふのは、自分が一人濟はれるだけぢやない、他の者も濟ひたい、自分が覺りを開くだけでなく、他の者をも覺らせたいといふ、所謂佛の慈悲の心持を自分の心持として修行し



て居るものでありますから、これは段が違ふ、しかしながら世の中に執はれない、世の中に煩はされないといふ氣分がモウ一足進めば、世の中のために力を盡さうといふ心持にまでなれるのだが、そこは僅かに一歩だ。人間といふものは幾度も申すやうに、怠け者ぢやないのですから、人間は働くことが好きなんであつて、決してジットして居られない者である、だから自分の利益のために働かうといふ心持がなくなれば、人のために動かうといふ心持はキット起るのであつて、どちらでもいゝからジットして居たいといふものはない、働くものなんです。それですからいつでも言ふやうに、捨てる心持があれば施す心持は出來るのであつて、決して人間は無爲無能にしてジットして終り得るものではない。たゞ求めたいといふ心持が強いものだから、それが心の全體を占領する、人のために施すとか、盡すとかいふ心持が起らないだけの話である。それ故に聲聞といふやうな、佛の小乘の教だけでも聞いて世の中に執はれないといふ心持がありさへすれば、それをモウ一足進めればいゝ、さうすると今度は世の中のために、人のために力を盡すことを喜びとするといふ氣分になる。それですから今こゝでは菩薩のために自分が教を説いて居るのだけれども、菩薩の行をまだしない者でも、この教を聞いて『アアそんなものもあるかナ、それは羨ましいナ、それをやつて見たいナ』といふ氣分が起れば宜しい。現在はつまらなくとも、しかし心が一轉して、菩薩の行を實行するといふ心持になつて行きさへすれば、それは今まで世の中に執はれない氣分で居つたことが決して無駄ではない、そこからでも行かれるといふのです。

『それで聲聞若は菩薩』今現在聲聞でありましても、或は菩薩の行をして居る者であつても、何れでありましても『我が所説の法を聞いて』佛が今まで説いた教を聞いて、さうして假令その中の偈一つで

も本當にこれを聞くといふことになれば、この聞くといふことは、耳に聞くだけぢやない、心に聞いてそれを味ふことを聞くといふ、たゞ一句でも一偈でも、それを信じて聞くといふことになりさへすればだん〳〵進んで佛の境界に行くといふことは、疑がないわけです。

日蓮聖人が法華經の二の大事、即ち法華經二十八品ある中の、前半の十四品の中心を成して居るものは『二乘作佛』の思想であつて、それから後の十四品の中心になつて居るものは『久遠實成』の思想であるといふことを言つて居られるのでありますが、それは洵に大事な事を掴へられたものであります。久遠實成の事は後で申しますが、こゝでいふ所謂二乘作佛、二乘といふのは聲聞と緣覺、聲聞は幾度も言ふやうに、佛の敎を耳に聞いて、さうして世の中の無常を觀じた者、緣覺は佛の敎を聞くだけでなく自分の毎日遭遇するところの出來事を見たり聞いたりしてこれに思ひ合せて世の中の無常を觀ずる者でありますが、その聲聞、緣覺といふものが佛に成れないぞといふことを說かれた經文は隨分多いのであります。世の中の無常を觀じて、自分一人で覺らうといふやうな考ばかりで居たのでは、いつまで經つても佛樣の境界には行けないぞといふことを說いた經文は隨分多い。しかしながらさういふ經典に於て釋尊が二乘は佛になれないといふことをお說きになつたのは、決して二乘を見捨てる心持でお說きになつたのではない、そこで止つてはいけないぞといふことを强く警告するために說かれたのであります。

下手にするとそれを讀み違へて、佛樣はモウ特別に機根のある人間だけを相手にされたので、低い奴は相手にされないのだといふ風に見て居る宗旨もあるのです。例へば法相宗などでは『一乘方便三乘眞實』といふことを言ふ、一乘といふことは、みな佛に成るといふこと、その佛になるといふことは方便





である、それは勉强させるために言つたのである、佛樣は三乘眞實といつて、聲聞、緣覺、菩薩と三種あつて、下の者は迚も佛に成れない、上の者だけ佛に成れると言つた、その事が本當なんだ、マア怠けろと言つては駄目だから、方便で勉强せよと言つたので、勉强すればみな佛に成れるのだぞといふのだけれども、佛樣の肚の中ではさうは思つて居ない、なあに仕樣のない者は、いゝ加減のところまでやればいゝ、せめて世の中の邪魔にならない、人に煩をなさぬところまで引張り上げればそれでいゝのだ一番善い者だけはそれが佛に成れるのだ、だから一乘方便三乘眞實だ、斯ういふことを法相宗では言ふこれもチョット考へて見ると、そんなことであるかナと思はれるのですが、今でも法相宗の人で隨分德の高いとか、學問のあるといふやうな人が居りまして、私共偶に會ひますが、やはりさう言つて居ります、名前を言ふのは少し氣の毒ですが、『どうも一乘方便だ、俺などは迚も佛に成れないと諦めをつけて居る』なんと言つて居ります、さういふ人もあるさう見るのも一つの見方ですけれども、しかしながら私共はさうは見たくない、マアそれはさうだけれども、その『お前達は佛に成れないぞ』と仰しやつたのは、決して聲聞とか、緣覺とかいふやうな低い修行をする者を見離して仰しやつたのでなくて、一度突き落して置いて、奮發して起き上つた時に更に引揚げやうといふ大慈悲心から、さういふことを仰しやられたのだらう、斯う思はれる、果して法華經に於てはその事を言つて居る。假令聲聞であつても緣覺であつても、それで足れりとしてはいかぬ、けれども、それからモウ一歩進んで、今度は大乘の修行をして大慈悲の心持を起しさへすれば、みな佛に成れるぞ、斯ういふことを言つて居られるのでありまして、これが釋尊の本當の御心持であらうと私共は思ひます。

今自分の境界がどうでありましても、現に斯んなことを言つて居る私などは凡夫でありまして、なかなか聲聞、緣覺どころではない、モットつまらない境界に居るのでありませうが、何れにしても求めて已まなければ必ずその極致のところまで到達出來るのだといふことは信じなければならぬだらうと思ふ。しかしながら求めて已まぬといふことは、たゞお經を讀んだり、學問をしたりすることでなくして佛樣が始終仰しやつたやうに、身、口、意の三業が完全に具はるのを求めることである。それだから法華經を讀めば誰でも成佛するといふことを、輕々しく言つては居ない、法華經を讀むといふのは、口に讀むだけを言つて居るのではない、口に讀むといふことは、心に信ずるといふことが伴はなければ何にもならぬ、身に行ふといふことが伴はなければ何にもならぬ、たゞ口だけで讀むならば誰でも出來る。併しながら口に讀むといふことが、無論輕いことちやない、本當に心の底から聲を出すといふことは決して輕いことちやない、その聲が人の心の奥にも響きまして、自分の耳にも響いて自分を正しい道に導いて行く力は非常に大きいのでありますから、口といふことが決して輕いことちやない、口先だけはどつちでもいゝなどと思つてはいけない、口に言ふことは非常に大事な事であります。口に言ふのも大事だが、心に思ふことも大事、身に行ふことも大事であつて、この間に輕重をつくべきものちやない。人に依ると、『口などはどうでもいゝ』と言ふ人がありますけれども、それはいけない。といつて、口で言ふのだけを行へばそれで成佛が出來るなどと思ふのは、それは非常に偏つた考といはなければならぬいつでも口に言ひ、意に思ひ、身に行ふことが揃つて行く、斯ういふことを考へなければならぬ、それが本當に法華經を讀む者であり、法華經を信ずる者である。だからそこを心掛けさへすれば成佛せんこと疑なしと仰せられた、この事は確かに實現されるのでありませう。今まで日蓮宗とか、法華宗とかいふやうな宗旨に屬して居る人が、そこを深く考へないで、法華は二乘作佛の道であるのだから、なんでも法華を讀んでさへ居れば、誰でも佛に成れるのだといふやうに淺薄に解釋したことは、これはどうも佛樣の御本意を餘り淺く解し過ぎたことで、困つたことゝ思ひます。電車の中でも何でも、出來るだけ餘計題目を唱へれば、それだけ早く佛に成るといふやうな人があります、なんでも一萬遍やつたとか二萬遍やつたとかいつて、回數を誇つて居る人もありますが、そんな上の空でやつて居るのなら、何遍やつても役に立たぬわけです。

私はいつでもさう思ふ。人の家に行つて玄關で『賴まうと言ふ、この頃ならば呼鈴があるから別ですが、呼鈴のないところで『賴まう』と言ふ、何遍言つたら奥へ聞えるかといふことです。それは大きい聲で言へば一度だつて聞える、口の中でぐずぐずと言つたら、百遍言つても聞えはしない、それを口先でぐずぐず言つたとけで、『二十遍言つても、三十遍言つても一向出て來ない』といつて怒るのは、それは怒る方が無理で、聞えるやうな聲を出さなければ聞えるものちやない、それと同じです。題目を何遍唱へたつて、口先だけでぐずぐずやつて居れば、百萬遍唱へても利目はない。腹の底から出たら一度だつて利くわけです。回數でいふべきものちやないそれで口に言ふのと、意に思ふのと、身に行ふといふことが揃つて行きますれば、必ず後には佛の境界に到達するでありませう。

そこで『乃至一偈に於てもせば』といふのは、心から本當にこれを身に行ふといふことであれば、必ず佛に成れる、二乘の輩も佛に成れる、斯ういふことを言はれたのは、これは確かにお釋迦樣の心の底から出た敎であらうと吾々には思はれる。以上が

『人一』といふことであります。

十方佛土の中には　唯一乘の法のみ有り
二も無く亦三も無し　佛の方便の說をば除く
但だ假の名字を以て　衆生を引導したまふ
佛の智慧を說かんが故なり

（十方佛土中　唯有二一乘法一　無レ二亦無レ三
除二佛方便說一　但以二假名字一　引二導於衆生一
說二佛智慧一故）

これは『教一』といふことを說かれる、『十方の佛土の中』といふのは、この娑婆世界だけではないこの娑婆世界には釋迦牟尼佛が出て教を說かれる、即ち釋迦牟尼佛の教化すべきところであるのですが十方の世界、際涯もない世界の中に於て、いろ〳〵な佛が出ていろ〳〵な教が說かれるだらう。併しどこへ行つて、どんな佛がどんな教を說いても、その教といふものは結局『一乘の法』といつて、凡夫が佛に成るといふ、その道筋を示したものだけである他に何もありはしない、『二も無く亦三も無し』二種も三種もあるものではない、絕對の眞理、究極の教といふものは二種も三種もあるものではない。尤も『佛の方便の說をば除く』『方便』とは相手に依つていろ〳〵の教を說いたもの、それはあるけれども、それは方便である、その方便の教を通つて行けば結局眞實の教まで行くのであるから、その方便の教は姑く別だけれども、本當の事を言へば一種しかないのである。『但だ假の名字を以て衆生を引導したまふ』初めはそんなことは解らないから『假の名字』といつて、極く假の淺薄な名前とか、文字とか言葉とかいふものを以てだん〳〵大勢の人間を導いていらつしやる、それは結局『佛の智慧を說かんが故なり』佛の智慧を有態に說いて、お前達も佛の境界に到達するまでは努力を廢めるなといふ、この事を說くために姑く低い方の教を說いた。これはつまり教といふものが結局一つ所に歸着しなければならないといふことになつて行くのであります。



『教一』といふことは、こゝではこれだけにして置きますけれども、モット後の壽量品に說かれて居るところと思ひ合せて見ますと、これは非常に大事な事になつて來る。といふのは、十方の世界の中に於て教が一つであるのだから、ましてこの土の上の娑婆世界に於ての教なんといふものは勿論一つになつて居るに違ひない。ところがこの娑婆世界に於てさへも、教はモウ種々無量である、佛教ばかりではない、婆羅門教もあり、耶蘇教もあり、孔子の創めた儒教もあれば、老子の創めた道教もあれば、マホメット教もあれば、波斯教もある、數へて見たらどれ程あるか解らぬでせう。その教といふものが結局一つ所に歸着しなければ、教一といふことの意味は立たないでありませう。

少し話が脫線しますが、それならば吾々が佛教を信じて居るといふ上から言つて、他の教をどう見たら宜いかといふことです。無論贋物と見るわけにはいかぬ、世の中に贋物はありはしないさういふことを考へる人もあるけれども、それは人間を侮辱したことであります。贋物が出て、まやかしが出て、さうして人を騙して、人を欺いて、その欺いた教が千年も、二千年も世の中で勢力を有つて居るといふやうなことが若しあるならば、人間といふものは他愛のないものです。そんなことを信ずるのは、人間が人間を侮辱することである。そんなことがあるものですか、それは十年や二十年は勢力を有つものがあるにしても、百年も千年も贋物が勢力を有つなんといふことのあるものではない。若しそんなことがあれば、人間はつまらない、人間を辭職した方がいゝ耶蘇が神の子として教を說いたものであつても、マホメットが神より送られた豫言者であるにして教を說いたのであつても、彼等は人を欺かうとも思はなければ、世の中を誑さうとも思はない、心から底から信じてそれを說いたので、決して己を欺いたの

でもなければ、人を欺いたのでもない。孔子も勿論さうです、老子も勿論さうです、誰だつて嘘をついて人を欺さうなんといふやうな淺薄な心持で教を說いたものぢやない。だから贋物と思つてはいけないしかしながら時代が違ひ、周圍の狀態が違ひその人の天性もあるしするから、心から思つて說いても、十分の事を說けない人がある、これは仕樣がない。譬へば子供が水に溺れた時に、飛び込んで救はうといふ親切はあるけれども、私共のやうに水泳の出來ない者が飛び込んでも救へないでせう、假に飛び込んでも一緒にアブ〳〵して居つて、他の人に救はれるかも知れない、それは仕樣がない。といつて、『あいつは贋物だ、救ふと言つて飛び込んで、嘘をついて人に救はれた、初めから救はれるつもりで飛び込んだのだらう』と言つてはいけない、心持は善いけれども、力が足りないからアブ〳〵となつてしまつた。それだから耶蘇でも、マホメットでも、孔子でも、老子でも、本當に人間を濟ひたいと思つて說いたのだが、その力に於て程度の違ひがあるから或る人は十だけ說くけれども、或る人は九だけ、或る人は七だけしか言へないでせう。それは仕樣がない。何もその人が嘘言をいふ爲めではない、力が足りないから仕方がない。

それだから吾々が佛教を信じて、さうして佛教以外のものに對した時に、どれも眞實の教だけれども惜むらくは力が足りなかつたので、佛樣の說く程度に說き至らなかつたのである、斯う思つたらいゝ、なにも贋物扱ひにするに及ばない。しかしながらモット進んで言へば、さういふやうにして孔子が教を說き、老子が教を說き、耶蘇やマホメットが說いて置いて呉れた事は、少くとも人間に對して、邪まな道を去つて、正しい道に就けといふことだけは教へて置いて呉れたので、それは決して無駄になつて居ない。どんな低い教でも、泥棒をしろ、人殺をしろ





といふことを教へたもの一つもない、少くとも人間に正しい道を志求めるといふことだけは教へて置いて呉れたのですから、それに對しては吾々は感謝して宜しい。そこで左樣な訓練をして置いて呉れたから、そこへ佛の眞實の教が弘まつて行けば、今までの訓練は無駄にならないで、そこから更に進んで佛の大乘の道に歸依することが出來るでせう。だから私共はすべての教に對して敵對の考を持つことはいけない、少しも敵對しないで宜しい。耶蘇の教も或る程度までは宜しい、孔子の教も、マホメットの教も或程度までは宜しい、虛僞を捨てゝ眞實を求めるといふことは人間に教へて居る、惡い事を捨てゝ善い方に向けといふことはみな教へて居る、だからその點はいゝ。たとその善いといふこと、その正しいといふこと、その眞實といふことに付ての觀察が十分でなかつたから、これは佛教に較べれば稍々劣つて居ると私共は思ふけれども、しかしながら教そのものがまるでつまらぬものではない、だからこれから後佛教を弘める人は、有ゆる教を敵にしないで、折角あそこまでやつたのだからモウ一歩進んで佛教の方に入つたら宜からうといふやうな、優しい心持を以て、それらの人に對した方が宜からうと思ふ。敵にする必要は少しもない。

モット露骨に言へば、佛教の教が十であつて、例へば他の教が九であり、八であり、七であつたとしても、教は十で一番上だが、十だけの教を聞いてまるで實行しない人よりは、七だけの教を聞いてまるで實行した人の方が偉いぢやないか、さうも言へる。それを思ふと吾々は恥かしい。吾々は佛教を習つて居る、佛教は十だけれども、これをチットモ實際にやらないならば、マホメット教が七位でも、それを實行して居る人の方が寧ろ人間として上であるかも知れない。さういふことも考へて見なければならぬ。私はこの間マホメット教の人で、日本に來て中

野の近邊にマホメット教の學校を開いて居る僧正といふ人に會ひました、日本語も可なり出來る人ですが、元は露西亞語でせうけれども、私は露西亞語が出來ませんから、こつちも怪しい英語で、向ふも英語で話した。話して見ると、なか〳〵偉い人です教義はマアつまらない、つまらないと言つては濟まぬけれども、話して見ても洵につまらぬ、しかし兎に角その人は洵に優しい人で、善い人であつた。自分は僧正でありますから相當裕かに待遇されて居るのでせうけれども、汚い着物を着て、夏も冬も一枚のフロックコートを着て、行つて見れば椅子のケットなどは破れて、情ない家に住んで居つて、さうして自分の得るところは悉く周圍の貧しい者や、氣の毒な者に施して、自分はいつも黑パンを食つて平氣で居る。あゝいふところを見ると、さう言つては惡いけれども、佛教の坊さんなどより偉い。佛の大慈悲を說いて居る人が勢力を爭つたり、地位を爭つたりして買收運動などをやつて居るのに較べれば、このマホメット教の低い教を說いて、自分の收入を悉く貧しい者を賑はすことに努める人の方がどれほど偉いか知れないと熱々感心した。そこで有態にさう言つた『僕は佛教を信じて居るのだが、佛教は君の信じて居るマホメット教より餘程上のものだと思ふしかし今のところで人間に點をつけたら、君に負けるだらうと言つて、有態に白狀して歸つたのであります。實際佛の教が幾ら勝れて居つても、實行しなければ何にもならぬのでありますから、私共は教といふものが佛教に依つて統一されることを信じて疑はないけれども、しかし佛教に依つて統一されるためには、佛の教を信ずる人々の行ひが、その勝れた佛教に適ふやうになつて來ねば、なか〳〵佛教で統一するなんといふことは出來ない、斯う思ふ。そこのところはお互に佛教を信じて居る者が餘程覺悟しなければならぬことだらうと思ひます。



それで結局は佛の教といふもの、殊に大乘の教といふものが一番尊いものでありますから、所謂教一で、これに依つて統一さるべき道理は同違がないでありませう。

その次の『諸佛世に出でたまふには云々』とあるそこから『行一』といつて、佛樣の御實行になりましたその行ひが始終一貫して居ることをいふのであります。それで四つになります、四一開會といふことをこの前申しましたが、理が一つであり、人が一つであり、教が一つであつて、行ひが一つである、これを四一開會と申します。

諸佛世に出でたまふには　唯だ此の一事のみ實なり
餘の二は則ち眞に非ず　終に小乘を以て
衆生を濟度したまはず
（諸佛出二於世一　唯此一事實　餘二則非レ眞
終不二以小乘一　濟度於衆生ト）

佛樣が世の中に出て何のために教をお說きになるかと言へば『唯だ此の一事』どんな惡人でも、どんな愚人でも、だん〳〵教へ導いて行けば、佛と同じものに成れる、どうぞ世の中のありと有ゆるものを佛と同じものにしたいといふことだけが本當の心持で『餘の二は則ち眞に非ず』聲聞とか、緣覺といふものを分けたといふことは、それは一時の方便であつて本當ではない。小乘の教といふものは便宜的に說いたものであるから、その小乘の教を以て『衆生を濟度したまはず』大勢の人間を濟ふのにそんなことで止めはなさらない。これは非常に私は尊い言葉だと思ひます、といふのは、世間では小乘の教といはれて居る教、例へば阿含經見たいなものを讀んで見ます、或はいろ〳〵な戒律など、小乘戒と申して嘘をついてはいけない、泥棒をしてはいけないといふやうな、極く淺い口元のやうな戒を說いたものを讀んで見ます。さうするとどんな低い教を說かれ

た場合でも、決して自分一人さへ助かればいゝといふやうな意味はなくて、出來るならば他の人のために力を盡せといふ意味が必ずそれに含まれて居る、そこが非常に尊い。私共は阿含經を讀んで見ていつでもさう思ふ、阿含は小乘であると言ふけれども讀んで見ると小乘だと思へない、やはり周圍の人のために力を盡さなければいけないぞ、周圍の人のために骨を折らなければならぬといふことを、いつでも言つてある。それが出來なければ、一人の人が助かるといふことも無論出來るものではない、人間は共に生きるものですから、一人助からうと思つても さうはいかない、周圍がよくならなければ助からないですから『小乘を以て衆生を濟度したまはず』といふ言葉は實際尊い、小乘の教では濟まない、假令その小乘の教を說いて居らつしやる時でも、心の底には、どうぞこゝから入つて大乘の、菩薩の行をするやうにといふことを念願せられ、さうして小乘の教を說いて居られるやうであります。ですから本當に佛はいつでも大乘といふことを考へて居られた。

**佛は自ら大乘に住　其の所得の法の如き**
**したまへり**

**定慧の力莊嚴せり　此を以て衆生を度したまふ**

（佛自住二大乘一　知二其所得法一　定慧力莊嚴
以レ此度二衆生一）

佛樣御自身は大乘に住したまふ、即ち最後の覺りを開かれたのでありまして、一切衆生を濟はうといふ大覺悟の上に立つて居らつしやる。だから『其の所得の法の如き』佛が自ら覺り得られたところは、『定慧の力莊嚴せり』『定』といふのは、心が決定して動かぬこと、『慧』といふのは、所謂智慧でありまして、すべてのものゝ眞實の性質を見極める力であります、その定と慧の力といふものを以て、佛の心全體が美しく嚴られて居る。その自分の覺り得たところを以て大勢の人間に教へ諭して、さうして大勢をその凡夫の境界から濟ひ上げて、結局佛の境界にまで導いていらつしやる。

**自ら無上道　大乘平等の法を證して**
**若し小乘を以て化す　乃至一人に於てもせば**
**ること**
**我則ち慳貪に墮せん　此の事爲めて不可なり**

（自證二無上道　大乘平等法一　若以二小乘一化
乃至於二一人一　我則墮二慳貪一　此事爲不可）

若し自分は一番上の大乘、最も勝れた覺りを開いて居りながら、人に說く場合には小乘といふ低い教だけを說いて、それで濟まして居るといふことであるならば、又その小乘で濟まして居る相手が假令一人たりとも、『貴樣はつまらぬ奴だからこの邊でやめろ』と言つて、その低い教でやめさせて居るといふことをするならば、『我則ち慳貪に墮せん』佛樣御自身が物を慳むといふやうな大きな罪を犯すことになる、『此の事爲めて不可なり』こんなことが出來るものぢやない。

『慳貪』といふことは前にも申すやうに、一つ心の兩方面であります、欲しいと思ふ心持があれば、一旦掴へたものは惜しい、人にやりたくないといふ心持が起る、凡夫はいつでも慳貪の中に生きて居る『人の持つて居る物は欲しい、自分の持つて居る物はやりたくない、』それでズッと行くのでせう。だから佛樣が覺りを開いて置いて、『他の者に斯んなことを言つてやるのは慳しいものだ、斯んなことを言つても解るまい、マアこの邊で廢めて置け』といふやうな風で、途中で廢められるならば、それは自分の覺つたところのものを慳むのですから、それは佛の心持ではない。ところが愚な人間、惡い人間をだん〳〵と教化して、佛樣のやうな心持にするといふ

ためには、どれほど骨が折れるか解らないから、その努力を厭ふやうな考が假にもあるならば、やはり慳貪といふことになつてしまふ。佛はモウそんなことはない、どんなに骨折つてもいゝから、一切の人間を佛樣御自身と同じにしてやらう、斯ういふ心持になる。

努力といふものは最後まで續けなければいけない

それに就て私は面白い話を聞きました。日露戰役の時に、露西亞の軍艦の自ら爆沈しさうになつたのを捕獲して、その艦を引張つて日本まで歸つて來た人を私は知つて居る。その人の話であります『艦を捕獲したのはいゝけれども、艦の中に居る奴は露西亞の兵隊だの、將官だの大勢居る、自分達は勝つた方だけれども、自分の方が頭數が少い、だからこの艦を捕つたといつても何時奴等が惡戯をするか解らない、どうしても寢られない、寢たら寢た留守に何をされるか解らない、それで斯んな苦しいことはなかつた、戰するよりは餘程苦しい、ウツカリして居たら何をするか解らぬといふので、なんでも三晝夜ばかり一睡もしなかつた、それはどうしても眠られない、ヒヨツとトロ〳〵と眠つたらどうなるか解らぬ、戰をするより餘程この方が苦しかつた』と言つて居りますが、それはさうでせう『それでその艦を引張つて到頭こつちの根據地まで曳いて來たその途中でウト〳〵ツとする、その時にハツと思ふ今こゝで眠たら今までの努力は駄目になるナと思ふそれで目を覺ます、又暫く經つとウト〳〵ツとする これは大變だ、こゝで眠たら今までの努力が無駄になると思つて、到頭最後の所へ來るまで、眠りさうになると、こゝで無駄になつてはいけない〳〵と思つて我慢して來てしまつた、さうして艦を引渡して陸へ上つて宿屋へ着いたら、玄關から二階まで上つたことを覺えて居ない、途中で多分眠て居つたのだらう、それで二階へ上つたら軍服も何も脫がないで



その儘眠てしまつた、それつきり朝まで目モウまるで寢通した』といふ話をして居りましたが、私はその話を聞いて驚々思つた、成ほどさういふものだらう、モウ一時間、モウ二時間、そこの辛抱が大變だ初めの一日は何でもない、二日目の一日は何でもないだらうが、最後の一時間の辛抱といふものがどんなに辛かつたらう、しかしその最後の一時間の辛抱が出來なければ、今までの苦心はまるで無駄になつてしまふ、それで到頭辛抱し續けたのでありませう其の事は吾々の修行の中に於ても多方それなんだらう、人を教化しやうと思つて今まで骨折つて、最後の一時間をいゝ加減にするために、今までの努力はまるで無駄になつたといふことがあるかも知れないだから怠けてはいかぬ、努力を慳むといふほど恐しいことはない、折角永い間善い事をしながら、最後のチヨットした努力を慳んだためにスツカリ駄目になるといふことがあります。

それでその最後の努力を慳むといふことは、要するに慈悲の心持の足らぬことであります。佛は絶大の慈悲を有つて居るからさういふことはしない、どんな惡人でもどんな愚人でも、結局は佛の境界に近づくまでは教化を慳むまいといふ心持を有つて居る若しその間に努力を慳むといふことであれば、自分は慳貪といつて、慳んだり、貪つたりする凡夫と同じやうなものになつてしまつて佛とは言へないものになる。決してさういふことはしないと斯う言つて居られる。

こゝまでが所謂『行一』であります。

**若し人佛に信歸すれば　如來欺誑したまはず**
**亦貪嫉の意無し　諸法の中の惡を斷じたまへり**
**故に佛十方に於て　獨り畏るる所無し**

（若人信二歸佛一　如來不二欺誑一　亦無二貪嫉意一　斷二諸法中惡一　故佛於二十方一　而獨無レ所畏）

本當に人間が佛を信じて、佛に歸依すれば、佛樣はその佛教に歸依した人間をいゝ加減に取扱ふといふやうなことは決してなさらない。勿論佛樣が人を欺す筈はないけれども、しかし斯ういふことはある吾々が人に親切を盡す時に、形には本當にお前のためだといふやうな樣子をして置いて、腹の中に少しでも努力を惜む心持があれば、欺さうとしないでも結局欺した結果になる、それは本當に考へなければならない。親が子供にお土産を一つ買つて來るのでも、どうも欺す結果になる、子供に帽子を一つ買つて來てやつた『子供によく似合ふだらうと思つて買つて來た』と言ふけれども、腹の中では、親は自分が好きで買つて來たといふ場合ならば、それは子供を欺して居る、『お前に似合ふ』のではない、親が自分が好きだから買つて來たといふことになる。さういふことが隨分ありはしないか、お土産を持つて歸るのでも、『これはお前のために』と言つて持つて來るのですが、時に依つたら自分の好きな物を自分が勝手に選んで持つて來たのであるかも知れない お前のためと相手に言ひながら、腹の中で自分の勝手が少しでも混るならば、それは結局欺かうとしないでも欺いたことになるのです。

だから佛が一切衆生に教を說く場合に、佛樣御自身の都合とか、御自身の關係とかいふことをチョットでも考へて居らつしやるならば、大慈悲といふことが嘘になる、それを言つて居る。佛は欺はしないし、いつでも大慈悲の心持を以てお前達に向つて居る、佛樣は自分の事などは假にも考へて居ない、若しチョットでも考へたらそれは嘘になる、斯ういふのであります、たゞ嘘をつかないぞといふ簡單なことではない。吾々は甚だ恥しいことですが、實を言ふと始終嘘をついて居る、『これは一生懸命だ』と言ひながら、ナーニ一生懸命ぢやない、腹の中では相當裕りがある。凡夫ですから始終嘘をついて居る、それは善い事ではない。佛は決して嘘をつかない、一切衆生を濟はうといふことを口に出して仰しやる通り、本當に腹の中で一切衆生を濟ふ慈悲を有つて居らつしやる。

さうして『亦貪嫉の意無し』貪るとか、人を嫉むといふ心持がない。私共は凡夫であるから、人の哀れなのを氣の毒と思ふだけの修行は出來ても、人が自分より幸になつた時に、それを一緒に喜ぶといふ修行が難かしい。これは洵に恥しいことでありますが、私共は學生時分から始終さういふ經驗をして居る、友人がノートブックなどを持つて來て見せる、『君、こゝのところが意味が解らないがどうだらう』と言はれると、『ナーニ、そんなことはわけはない』と言つて敎へてやる。その時はこつちが知つて居つて、向ふが知らない、向ふを下目に見るからいゝ氣持で敎へてやる、別に惡い料簡ではないそれから今度は試驗などがあつて、向ふの奴が自分より成績か好いとなると、『馬鹿々々しい、あれを敎へなければよかつた、この次にはモウ敎へないぞ』といふやうな心持になる。電車の中でお老人が來たら氣の毒だから『お掛けなさい』といつて腰掛けさしてやつたのはいゝけれども、そのお婆さんがいゝ心持に眠つて居たり何かすると『ナーンだ、居眠りをして居るのか、その位なら立つてやらなければよかつた』と思ふ。向ふが氣の毒であると、向ふが氣の毒だと思ふ心持があつても、向ふが幸福になつた時に、これを喜んでやるといふ心持がないと、結局慈悲は恨みを起す本になる、それが難かしいところであります。簡單なその位のことならいゝが、人に敎へるといふ場合に、敎へた相手が自分より偉くなるといふことを、心から喜んでやるといふことはチョット難かしい、しかし佛はさうぢやない、佛は敎を慳みも何もしなければ、又他の者が佛と同じになつたといつて、それを嫉んで隔てる心持はないので

ある、いつでも誠心を以て、大慈悲を以て大勢の人間に向つて居るのである。『諸法の中の惡を斷じ』といつて、有ゆるもの、有ゆる事柄の中の惡いことは殘らず佛は除いて、惡い料簡とか、惡い事柄とか惡い心持といふものは一つもない。

それだから『佛十方に於て獨り畏るる所無し』とある、自分の心に省みて、誰に對しても惡い心持を有つて居なければ、畏るゝところはない筈であります。ところがどんなに偉い事を言つて居つても、心に退け目があれば、人に對して畏れるところが出來て來るのであります。佛はいつでも大慈悲で說いて居りますから、畏るゝところがない。大集經の中に慈悲を行じ、布施をすることの利益を說いて、『衆に入つて畏れず』とあります。この衆に入つて畏れずといふ境界になれば偉いものです。大勢の中に入つて何ともない、それが本當の人間の安樂の天地でせう、どれほど大勢の人間の中に入つて何ともありはしない、自分は心に省みて、自分のためをやつて居ない、人々のためにやつて居る、それを誤解するのは向ふの勝手である、それを恨むのは向ふが足りないからである、自分の心に省みて何ともない、斯ういふことでありますから、『衆に入つて畏れず』といふことになつて行くのであります。

ところがそれだけで終れば、まだ意味が小さいのでありますが、衆に入つて畏れずといふ意味をモット深く言ふと、衆といふことを人間だけに言つて居ない、有ゆるものといふことを言つて居る。吾々の信仰はそこまで行かないといかぬ、人間だけぢやない、衆といふのは、有ゆるもの、草にも木にも、山にも川にも、野にも原にも、どこに行つても何ともない、チットモ惡い事をして居ない、チットモ自分勝手なことをやつて居ないのだから何ともありはしない。勿論それは災難といふことはありますから、暴風に遭つて汽車が轉ずるかも知れない、雷が落ち



て來て自分が死ぬかも知れない、それでも何ともない。自分が人間として爲すべき事をして居るのでありますから、いつ死んだつて、どんな目に遭つたつて何ともない。天地の間に處して、一人で眞直ぐに立つてチットモ怖いことはありはしない、どんなことがあつても怖くもない。この心持これが所謂衆に入つて畏れず、その心持があつて初めて吾々は世の中に立派に立てる、眞直ぐに立つて居られるのであります。人間ばかりではない、天地の有ゆるものに對して憚るところがない、少しも畏れるところがないのであります。

支那の孔子の時代に、桓魋といふ人が孔子を憎んで、孔子が木の下で弟子といろ〳〵話をして居る時に木を伐り倒さうとした、ところが運好く孔子は免れたのであります、その後で孔子が言ふには、

『天德を予に生せり　桓魋其れ予を如何』

桓魋が俺をどうすることが出來るかと言つた。どうすることが出來るかといふのは、それは木を伐り倒されゝば敷かれて死ぬかも知れない、死んだつて俺がどうなる、どうにもならない、殺されたつて自分は何ともならない、自分は自分だ、『桓魋其れ予を如何』といふことを、俺を殺すことが出來ないといふやうに解釋するのは淺い考であります。殺されるかも知れない、こつちは刀を持つて居ない、向ふは刀を持つて居る、こつちがウッカリして居る時に木を伐り倒されるかも知れない　殺されても何になるか、少しも自分は困りはしない、爲すべきを爲して居るから何でもないといふのであります。私は論語のあのところを讀んで『成ほど、こゝだナ』と思つた、『予を如何』といふやうな心持になれば何でもない、衆に入つて畏れない、本當に自分が自分の爲すべきことを爲して、私といふものを少しもやらなければ畏れるところがないのです。人間も畏れない、雷も畏れない、地震も畏れない、どんな災

難に遭つても、今直ぐ死んでも何ともない、この心持があつて初めて世の中に悠々として立つことが出來るのであります、しかしそれは佛樣一人のことではない、孔子樣一人のことではない、吾等とても修行を積んで行けばそこになれるぞといふことを佛樣は請合つて居らつしやる、そこを一つ目標にして行くより外はないのであります。それでいつでも佛樣が御自分のことを仰しやるのは、決して御自分のことを吹聽するためではなくして、お前達もキットこゝへ來られるぞといふ意味で仰しやつて居るのであります。

**我相を以て身を嚴り　光明世間を照す**
**無量の衆に尊まれて　爲に實相の印を說く**
（我以レ相嚴レ身　光明照二世間一　無量衆所レ尊
爲說二實相印一）

『我相を以て身を嚴る』といふのは、三十二相をいふ、顏つきがどうだ、眼つきがどうだといふやうなことが三十二相でありますが、それは心の德が自ら相に現はれるのであります。さうして、『光明世間を照す』周圍中を明るくする大きな光を有つて居る。『無量の衆に尊まれて爲に實相の印を說く』『實相』といふのはすべてのものゝすがた、『印』は人の心に深く織り込まれる敎です、所謂印象する、それを印といふ。敎といふものが如何に巧妙であつても、それが相手の心にシッカリと殘らなければ何にもならない、だから自分は實相の印を說く、本當に眞實の相を見極めて、それが聞いた者の心に深く打ち込まれるまで敎を說いて行く。それだから自分の敎を本當に身に引受けて修行する者があれば、その敎が必ず大きな力になつて、後には必ず佛の境界に到達することが出來るであらう。斯ういふのは、つまり釋尊が世の中に出て敎を說かれた、その目的を打ち明けられると共に、その敎を聞いた者が努力を懲んではならないぞといふ心持で說かれたものだと思ふのであります。

（第二十三講了）



## 本部團報

**御會式**　十月は日蓮聖人最後の聖月に相當するので、恰度十三日は日曜日ではあるが、都合に依つて十一日の夕景から、生憎の雨天であつたが、これ却つて天もこの偉聖の忌辰を悲むかと思へば、降雨も一入有難く感ぜしめらるゝのであつた。

改装された講堂の賽壇に、最も莊嚴された御本尊の寶前に於て、小西、梶木、和賀、釋等の諸師に隨つて本郷氏其他本團幹部及び一般の大衆至心に讀經唱題法味を捧げ、大慶報謝の一油に擬し奉つた。

七時廿分磯部常任理事の開會の挨拶から講演會に移り、小西日喜師の聖祖を憶ふ熱誠の法話があり、八時十分より高野修道氏奉仕の日蓮聖人御一代記映畫に感激新たなものあり一時間後小林一郎先生の法華經の行者と題する講話に彌々感憤興起せしめられ、十時閉會に際して一同題目を三唱して蓋を閉ぢた。

當夜は大藏省の關原さんや、三菱の佐藤さんなどのお顏も見へ、遠く横濱、大森邊からも隨喜參詣されたことは涙のこぼるゝやうに感じた。因に敎誡約百部を施本された。

**健康週間**　十月十五日から二十一日まで一週間、東京府、東京市、警視廳主催の下に健康週間を催されたので、本團に於ては物心不二の見地から當區役所、警察署、町會と協力して十六日午後一時より三時半迄、及び二十日午後六時半より九時半迄二回に亘つて衛生講話や健康と信仰の話が、警視廳石井、長澤兩技師、友安大塚署長、相良課長、出水醫師、磯部理事等に依つて簡結明載に口述され、且つ敎化團體聯合會からの映畫に毎回超滿員でこんな時は會館の手狹であることが甚だ遺憾とされた。勿論映畫には普通子供が大部分であるが、愛には十五歲以上で効果百パーセントと一同大歡びであつた。

**法華經講座**　『法華經と申は八卷一卷一品一偈一句乃至題目を唱ふるも功德は同じ事と思食すべし』とも亦『法華經は何れの品も先に申しつる樣に愚かならず』と聖訓にあつて、正宗分の講義は聽くけれども、流通分はモー有難味が薄いなどゝ思つては大間違で、寧ろ流通分こそ私共の修行の上に結構な事が澤山に盛られて居るのですから、目下妙莊嚴王品に入つて最早終末に近づいてゐますが、折角御精進あらん事を爲法に祈つて止みませぬ。

**日曜日集會**　十月の日曜集會は、六日、二十日と左記の通り最修法莚が開かれた。

聖日蓮を拜して　磯部　滿事氏
法華經概說　河合　陟明氏
知來の使と國の眼　和賀　義見師
三界火宅の聖訓　山口　智光師
日蓮聖人と彌三郎　中村　清一氏

## 横濱敎誌

**九月一日**　中區千歲町の青柳氏方にて、會員參集して、關東大震災殊死者の追善廻向をする。

**同　四日**　神奈川區篠原町西村氏方にて唱題修行。

**同　七日**　神奈川區羽畑町高部氏方にて、磯部先生の御法話。

**同　九日**　磯子町の高橋氏方の例會、和賀師及び磯部先生の御話。

**同　十三日**　中區蓬町の長久保氏方にて磯部先生の女人成佛に就いての御話。

**同　廿日**　程ヶ谷笹下の齋田氏方へ有志集

りて題目修行。

同　廿一日　磯部先生の今はなき御令閨、大願院建立妙護日當教女靈位の滿一週忌に相當。會員方の主唱で、一同思出深い磯子の先生御舊宅に寄り集つて、和賀師を御導師に願つて心からの法要を營んだ。忙しい會員の方方が然も雨の中を、殆んど一人殘らず參集して御廻向したのも、一ツにかゝつて故聖靈がのこされし德のいたす處であらう。磯部先生御父子、亦勿論參會なされた。

同　廿五日　磯子町北山氏方にて、磯部先生の御話。

同　廿六日　中區宮崎町石毛氏方にて唱題修行。

同　廿七日　神奈川區三ツ澤の齋藤氏にて小西師を中心とする例會。磯部先生も御參加

同　廿九日　中區南太田の川又氏方にて唱題修行。

## 福島支部報

十月十八日（金）晩、大町中村様方に支部例會。中村氏妹様の七週忌法要を河合先生唱導の下に嚴修す、當晩は特に三春の渡邊様、靜岡の望月氏御出席なされ、しめやかに故聖靈を偲んだ。佐渡御書の御講話あり、會員の活氣ある質問あり、嬉しい會は何時迄も續いた。

同　十九日（土）午後一時、高南例會。河合先生の法華經講話、讃嘆品より藥草論品に至る。先生の熱烈な氣魂と眞摯な會員と兩者合して些も緩みなく、眞に豊な收穫多き集りであつた。

## 二本松報

九月一日　午前十一時五十八分關東大震災横死者第七回忌法要を修行。

同　九日　夜、宗祖松ヶ葉谷御法難會修行。

同　十日　福島縣私設社會事業聯盟總會を福島市產婆學校に於て開催す、因つて出席す。

同　十三日　司法保護デーに就き免囚保護事業安達佛教慈善會に於ても町内宣傳並托鉢修行。

同　十八日　午後一時五十七分當驛通過にて戰死者遺骨五基郷里に歸る、因つて出迎護經す。

同　同日　滿洲事變物資第四週年記念新嘉會修行。

同　廿九日　救濟事業二本松佛教不染會托鉢修行。

## 寄附金維持及團費誌料領收

（自九月二十一日
至十月二十日）

一金貳圓五拾錢也　福島　永井　節子殿
一金貳圓貳拾錢也　ホノルヽ小林　日種殿
一金五圓也　愛知縣　三城　昏吉殿
一金貳圓四拾錢也　東京　水元　直行殿
一金壹圓也　同　小峰　豊子殿
一金五圓也　同　亀岡　豊二殿
一金壹圓也　大阪　濱田鶴太郎殿
一金四圓四拾錢也　富山　田村幸次郎殿
一金貳圓五拾錢也　神奈川縣田澤　留吉殿
一金貳圓五拾錢也　東京　栗原　敬三殿
一金拾圓也　同　石川　隆一殿
一金六圓也　同　渡本　正殿
一金六拾圓也　横濱　中村清兵衛殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　宮下きく子殿
一金拾貳圓也　同　神原豊次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　森　千代殿
一金壹圓貳拾錢也　福島縣　中島　元道殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　杉本　光衛殿
一金貳圓五拾錢也　同　西村　喜勢殿
一金七圓五拾錢也　東京　山本政次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　長府　津田　信子殿
一金貳圓五拾錢也　島原　加島　時秀殿
一金壹圓貳拾錢也　愛知縣　中村新次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山　稲原　克治殿
一金貳圓貳拾錢也　大連　重松　弘通殿
一金貳圓也　横濱　青柳　榮一殿
一金貳圓也　東京　沼部彌太郎殿
一金六拾錢也　大阪山乃神傳道隣殿
一金貳圓五拾錢也　東京　川崎豊次郎殿
一金五圓也　同　山口　智光殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

### 念告

『財施も法施も更に優劣あるべからず』と釋尊は布施を奬勵遊ばしてゐます。願くは私共の教化運動御清援の御高慮を以て誌料は何卒前金にお願申上ます。

猶團費と誌料と御混同なきやう、正團員は年額金貳圓五拾錢、贊助團員は金五圓等々ですから宜敷お願申上ます。

財團法人統一團會計

清水龍山　守屋貫教　中谷良英
鈴木一成　榊原久遠　共編

# 新修略註 日蓮聖人遺文集

再版改訂

内容見本呈上

科段別註 御遺文百廿余編（脚註入）

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

体裁 裝幀
卷頭挿入クリームアート寫眞版七葉
四六版　縦六寸二分　横三寸五分
紙數　千百十四頁
特製　總皮　三方金
並製　總クロース　天金
函入最上美本

定價　特製　三圓八十錢
並製　二圓八十錢
送料　廿一錢

發行所　久遠閣
東京市日本橋區江戸橋二ノ六（明正ビル）
電話日本橋㊀三一七番
振替口座東京七二八〇六番



本多日生上人著書特價提供

聖語錄　改版　特價　送料共　金壹圓八拾錢
法華經要義　歸天寶　仝　金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓　仝　金壹圓五拾錢
日蓮主義精要　仝　金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價値　仝　金貳拾五錢
法華經要品　仝　金五拾錢
日生上人レコード　仝　金參圓廿五錢
日蓮聖人　仝　金拾錢

礒部滿事謹輯
本多日生上人　特價　送料共　金壹圓七拾錢
勤行作法　仝　金拾錢

河合陟明著
皇道と日蓮主義　定價　送料共　金壹圓

月刊「教」誌　定價　送料　一冊　金拾錢
一ヶ年前金　送料共　金五厘

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人統一團出版部
振替東京九四二〇番



統一定價　一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十年十月廿四日　印刷納本
昭和十年十一月一日　發行
（第四百八十八號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　礒部滿事
印刷人　大辻松太郎
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

# 目次

聖訓摘要……日生上人
釋尊中心の本尊觀について……中村清一
法華經講話（第二十四講）……小林一郎
梶木顯正師遷化
亡き師範を憶ふ……村田顯明

○寄附維持金團費誌料領收

第四十年　十二月號